
愛しさも、切なさも。

如月らむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛しさも、切なさも。

【Nコード】

N6181Y

【作者名】

如月らむ

【あらすじ】

ある夜偶然に出逢ったのは、長年の海外勤務から帰国した男の人
Ⅱ「兄」。気づいた時には既に立っていた禁断のフラグ。誰にも言えないオフィスラブ、決して赦されない：愛しくも切ない大人兄妹・極上の禁断 Love Story。他サイト様にて執筆した作品【愛しさシリーズ＜運命編＞】の 改訂・完全版。内容・描写にかなり差がありますので、こちらをお読みする事をお勧めします。※中盤より濃いめの禁忌ベッドsceneを含みます。

◎ Introduction (前書き)

章ごとに設けられた、みゆとアキの呼び掛け Introduction。
on。

これらはいずれも物語後半のあるトキのものです。
ぜひ、お気に留めながら読み進めてみて下さい。

◎ Introduction

——ねえ、アキ：覚えてる？

13年ぶりに偶然再会したのが この場所だったよね

アキも 私も お互いの事全然気づいてなくて
血の繋がりもない「他人」 みたいだったっけ

……笑っちゃうよね。

あれから季節は変わりゆくのに
私の心はずっと、ここに。立ち止まったままだよ…。

私たちの運命は やっぱり どうしても 変えられないものだった
のかな？

「愛しさ」とは永遠に、「切なさ」を越えられないものなのかな…

ねえ、アキ…？

できることなら……—もう一度。
それが叶うなら……—何度でも。

あなたに、出逢いたい…

” あなたと出逢えたことが運命ならば…きっと。

この愛は——永遠になる”

…出逢え、ますように——

——

◎ Introduction (後書き)

現在公開している『愛しさも、切なさも。』とは
内容が異なる箇所があり、新たなエピソードが加わっています。
また性描写においては、より濃いめになる予定です。

#1 運命のイタズラ ―?―

side みゆ

あなたとの出逢いまで、アト…1、2…：…：…3歩。――ドンッ！！

『――あつ、ごめんなさ…！』

――ここは、新宿のビル街。

残業からようやく解放され、クタクタな足を引き摺り新宿駅までの道のりをフラフラと歩いていた時のこと。これはただの私の不注意？それとも誰かのイタズラだったのかな？今私は、見知らぬ人の胸の中に真正面から頭を突っ込んでいたりしているワケで。

けれど早く離れなきゃ、きちんとお辞儀をして謝らなきゃ、といくら頭で常識を反芻しても、思うように体が動いてくれない。クラクラす、る…：

「…また随分と凄いぶつかり方だな、前見てんのかよ…」

そんな…人様に大迷惑をお掛けしている私こと

桜木 みゆ（23歳）は、社会人2年目の言わばOL。

と言っても、勤め先・一流化粧品メーカー＜プール・マシエリ＞の経営者はお父さんで

その娘の私は一般的に「社長令嬢」って呼ばれるみたいだけれど。

その大企業の社長令嬢がなぜOLをしているのか：不思議だよね、私もそう思う。

でもこれはお父さんとお母さんの願いでもあるの。

”みゆだけは家柄のシガラミに囚われず、極普通の女性として育ってゆきなさい”

”決して傲ることなく：普通の生活を、自由な恋愛を、ごくありふれた幸せを”

「——何やってんだよ：いつまでそうしてる気？」

：そうして数秒経たないうちにも

ガクガク震える足、ズルズルと崩れゆく視界、ゆらり遠のく意識――。

軽く目眩を起こしている私に、彼の苛立ちを氣遣っている余裕なんて勿論なく

目に映るものを追いかけるだけで精一杯だった。

：あ、洗い立ての匂い香る白いシャツ！良質のスーツ？ネクタイ、ベル、ト：

「：あのな、！？……どうした？」

：——そのまま私は軽い貧血を起こしたらしく、数分気を失っていた様子で

気づけば初めて会った男の人のワイシャツをシワクチャになるほど握り締めていた。

私、ずっとこの人に体を支えられてたの――？

スーツのその上を見上げてみれば

力強そうな腕、懐かしさに似た暖かさを感じる胸板、定間隔で響く「おい」の呼低音

この抑揚のない響きに焦ってサッと見上げた先には、薄暗闇に光る……切れ長の瞳

私を下に下に見下ろすその瞳は、温かみの欠片なく鋭く尖っていてその瞳を引き立てるのはシャープな顎と、スッと通った鼻筋キリリと勇ましい眉毛

そのパーフェクトな美形顔に胸の鼓動がドクンと一打ちした時心までもが驚掴みにされてしまう。

——ねえ、一目惚れって、信じる？

——他人に、一瞬で恋に堕ちれると、思う……？

その人を見ているだけで、呪文にでもかけられたみたいに体は固まってる。

それでも体の芯から訴えかける鼓動はずっと加速し続けていて。

思わず手を当てた胸の鼓動が彼に届きそうな位……心が大きく、大きく——揺れ動く。

「気分が悪いなら医者にも診てもらおうといい。俺は御免だ」

なのに、トキメキ初体験も虚しく

彼は気だるそうに目線を外し、不機嫌な顔つきでギリッと睨みつけるの。

背筋も凍るその冷たい声で。素っ気ない言葉を春風に散らして。

だから体の弱ってる私に返事をする暇も与えず

何事もなかったようにクルリと背を向けて歩き出す彼に————
——然、呆然……。

え、ちよつと、感じ悪くない：？

私だって迷惑かけて悪かったとは思ってるけど、でも！
もうちよつと人的な何かがあってもよかったと思う！！
ちよ、ちよつと男前だからって気取っちゃって。

久しぶりのイケメンに奪われたこのドキドキどうしてくれるの？
貴重な乙女心、返して欲しいっ。

ねえ、返してよ……。

細めの体つきにスラーツと伸びた背丈

少し耳にかかる位のサラサラしていそうな漆黒の髪

彼が：遠のいていく…。

何も語らない背中自信に満ち溢れた姿勢

後ろ姿にさえ心を奪われるなんて私、どうかしちゃってる。

もしも彼が心優しい人だったら

ここから恋が生まれてもおかしくないハプニングだったのに
蓋を開けてみればただの冷血様。

なんて夢みたいなことを思い巡らせていると

何かを思い立ったように急に振り返る彼。

——私を、見て、る…？

またあの突き放した口調で何か言われるのかな？それはそれで、怖
いっ…。

そう私がオドオドとしている合間にも

コツコツと靴の音を鳴らして一直線に私へと歩み寄る彼の音
その歩み寄る一步一步にどうしようもなく鼓動を乱されて
高鳴る胸に手をグッと強く押し付けた。

だってそうでもしないと、この心臓ごと…心ごと。
思わず、恋を。してしまいそうになるから——。

息のかかる距離に来ていた彼ら放たれた、目が眩む程の鋭い視線
その無言の威圧感にさえグラグラと心が揺さぶられていく。

「背中に視線感じただけ？——何？」

『お詫びと、お礼……を……』

私の目の前を通り過ぎていく彼の逞しく綺麗な指先が
迷うことなく長く伸びた私の一束の髪を持っていくことで、言葉ま
で奪われる。

「少し触れただけで期待して…本当分かりやすい女だな…」

お願い…そんな風に見つめないで？冷たくしておいてそんなに優し
く触れないで。

私の全てを、持っていないで…。

そう私が身動きの取れないことをいいことに、腰を少し屈めた彼は
最後に…悪戯に。ただほくそ笑んだ。

「——欲しいならくれてやるよ」

掴まれた髪の毛を軽く引っ張られると
その先に待っていたのは、肌と肌で感じるあなたの……温もり。

——それは、突然のこと。

——これは、偶然のこと。

——「偶然」と言う名の「必然」に変わる時。

私の唇は今さっき会ったばかりの男の人の温かな唇に——包まれていた

「他人」として初めて出逢った、あなたの唇に——。

ねえ、今の。何のキス：——？

フワッと離れた彼の唇を思わず目で追ってしまう。

挨拶代わりって言ってもいい位さり気なくて

それでいて熱い何かを刻み込まれる、この感覚：

突然のハプニングでキスをしてしまった恥ずかしさに煽られ続ける

：胸の鼓動

この状況を把握しきれてないのに、戸惑いと欲望がみるみるうちに膨らんでいく。

瞳がぶつかり合うだけで羞恥心を丸裸にされて

それでも更なる甘い香りを感じ取って反らせない視線。

私の心をまるごとさらってしまうズルい眼差し。

でも唇まで奪うなんて、反則……。もっともっと。欲しくなる——

「そんな瞳で俺を見つめてんな」

——そんな、目：？

考えてる暇も与えてくれない彼にグイッと強く顎を引き寄せられて
今度は唇にカブリつくように力強く、欲望のままに。奪われる

「もっと奥まで欲しいんだろ？」

浮いた唇から漏れ彼の強気な吐息、煽られる……甘い願望

『…んっあ、ちょ、んう——…っ』

「…えろい顔……」

2人の唇が潤って、私の心の中を覗き見るように奥深くまで入って
きて

直接脳を刺激されるから頭の中をカラッポにさせられる。

きつとこの人：キス、すごく巧いんだ…

こんなに夢中にさせるキスをするなんてほんと、反則だよ——。

強引に奪っておきながらも、頬を包むのは優しい彼の手
壊れる程胸打つ鼓動をもみ消す吐息に紛れた私の甘い鳴き声
ビル街のど真ん中で何度も何度も重ね合う唇

私は、熱く。深く。あなたに、奪われる——：

「……お前、隙だらけだな。よく痴漢に遭うタイプだろ…気をつけ
ろよ?」

『えっ…あの…!?!?』

「どうせ此処の社員だろ?…運が良ければまた相手してやるよ」

けれどそのヒトトキは、夢のように儚くて

彼は傲慢さたっぷりの一言を残し、何もなかった素振りで立ち去っていく。

せめて名前と携帯番号位聞くべきだったんだろうけど
現実かも分からないフワフワした気持ちでお腹一杯でそんな余裕は
全く無くて

初めて暴かれた甘い欲望を抱えたまま、私は暫くその場所から動け
ずにいた。

——全ては、ここから始まったの

ほんの僅かな出来事、衝撃の走る出会い
イタズラな運命が落としていったもの。それは……——禁断の
フラグ。

——次の日、迎えたいつもの朝

ベッドから起き上がって支度を済ませダイニングチェアに腰を下ろ
すと

テーブルの上にはいつもの様に、和の朝食が用意されていたのだけ
れど

食べて欲しそうな紅鮭を食い入るように見つめながら考えてしまう。

昨日は冷静に考えなかったけど

初めて会った人？ しかも思い切り街中で？ キスしまくっちゃった
んだ：！

今思うと、ありえないよねえ……

一夜明けてしまうと、あれは夢だったんじゃないかって気もする
それでも、今でも唇がじんじんと訴える…真実味帯びたアツい熱
私もどうかしてただけど、未だにあのキスの意味が理解できずに
いる…。

つき合いましたよ！って感じでも無かったし、これからって感じで
もないよね…

たとえ同じ会社の社員でもウチは自社ビルを持つ程の大企業、もう
会えないだろうし。

でも、「わかりやすい女」ってどうゆう意味だったんだろう？

「みゆ、早く食べなさい！遅刻したらすぐお父さんにばれちゃうわ
よー？」

そんな答えの拾えない疑問を吹き飛ばしたのは、お母さんで。

お父さんが社長を務める会社だからって社会に甘えは通用しないと
よく言い聞かされるの。

ちなみに私の勤める部署は、新しいプロジェクトを任されている企
画開発部

兄妹3人揃って、大学卒業と共にお父さんの会社に入る事なってい
た。

「タカも昇進したし、みゆも社会人として働くまでに立派に成長し
てくれたし

お母さん、一安心よ」

…タカには桜木家の長男（31歳）

社長であるお父さんは昔から仕事ばかりだったから

小さな頃から、私にとってはタカにいがお父さん代わり。
長男だけあって次期後継者・今ではもう専務なの。

「アキも向こうで頑張っているのかしらね…」

…そしてアキは桜木家の次男（28歳）

アキとは年が5コも離れてるけど、私が昔ブラコンて呼ばれた程仲がよかった。

頑張ってる仕事しているのだろうけど、アキ、元気してるのかな…

『アキ、ロス支社にいたんだっけ？』

中学卒業と同時に留学してそのまま支社に入社しちゃったもんね…』

「そうよねえ。たまには帰って来てくれればいいのに…」

アキは留学してから13年間一度も家に帰って来てない、たまーにメールが来る位。

顔見せに位帰って来ればいいのに…相変わらず冷たいんだ…

そうしてお母さんも私もそれぞれ思いふけていたら…、わ！！？？

「——みゆ！時間！！」

『あっ——行ってきました！！』

昨夜の余韻に浸る間もなく、ひたすら走り駆け抜ける新宿ビル街
滑り込みセーフで何とか辿り着いた、私のオフィス

『絵里花、奈緒、おはよー！』

近年新設された職場、企画開発部には私と同期の女の子が2人いて。

流行り物が好きでまさに合コン受けしそうな

可愛い木村きむら 絵里花えりか。

絵里花よく色々な部の人達との合コン話を持って来るから社内では「合コンの女王」とも呼ばれている。

「ねえみゆ、今度広報部と飲む約束したからあー奈緒と3人で行こうねえ♪」

そして絵里花の甘ったるいブリッコ口調に乗った誘いを向かいのデスクからスパッと断ったのが

高級ブランド物好き、まさにおじさま受けしそうなお姉キャラの岩崎奈緒いわた なお

「絵里花の人脈網ってどこまで広いのよ？」

私は若い（男）パスだから。あーみゆは行くってよ？？」

『奈緒！私まだ行くなんて…』

絵里花の用意してくれる合コンはいつも良い人揃い。

入社以来彼氏のできない私にはとても嬉しいお誘いなんだけど：

「わぁーい！今回も頑張ろうう♪みゆってキレーなのに男っ気ゼロなんだもん。」

そのJK並の恋愛思考、変えた方がいいと思うなあー」

相変わらずその可愛いブリッコ口調でズケズケ心に釘を刺すものだから

毎回快くお返事ができずにいたりする。

でも絵里花の言うとおり：

付き合った人がいてもいつも本当にこの人の事が好きなのかな？って考えちゃって

結局すぐ別れちゃうんだよね：

過去のトラウマってなかなか消えてくれない：：本気になるのが、怖い――。

：その時なぜかフと思い浮かんだのは、昨日の彼。

もしまた会える距離にいたら、トラウマも吹き飛ぶ位好きになれるのかな？

彼のあの私を見る目も、キスも：思い出すだけで体が熱くなる：

あんな風に瞬間的に男の人に惹かれた事は初めてだったから

いつも自分の気持ちに自信が持てなかったから：

その点、絵里花は恋愛に素直な性格をしていた。

惚れっぽい上に好きになると真っ直ぐで、あつと言う間にのめり込んでゆく：

その怖いもの知らずな所がちょっぴり、羨ましい。

ちなみに、奈緒も彼氏がいるみたいだけど

奈緒はあまり自分の事を私達に話してくれない。何か深いワケでもあるのかも：。

――そんな、雰囲気も性格も全く違う3人だけど

私たちは入社した時から休みの日も遊びに行くような仲の良い友達だった。

そして、雑談に終止符を打ちに訪れたのは就業時間。

今日は、私が入社して丁度1年が経った日でこの企画開発部に人事部の人が入ってきては、新入社員の紹介をしている。

「さあ来なさい。えー今日から開発部に配属された沢田さわだ 亮介りょうすけ君だ」

…へーえ。格好いい顔しちゃってるわー。となると…絵里花を見ると案の定：

「木村絵里花でえす！ジャニーズ系だよね沢田くんてえ♪彼女とかいないのお？」

やっぱりー！席に座った沢田くんに早速絵里花が絡み着いていた。

「今いないっスねー」

「ええ？。もったいないい！かっこいいのにい」

そこですかさず奈緒が絵里花にツツコミを入れ

「いい男見るとすぐそうやって興味津々にがつくのやめなさいよ、見つとも無い…」

けれど絵里花は動じずに、自慢げに言い放ってみせる。

「だってえ、いつどこに彼氏候補が転がってるか分からないじゃあ
ん。

積極的にいかないと損ソン♪」

だからその前向きすぎる絵里花に奈緒と私が呆れた顔をしていると少し照れながらも、沢田君がキラキラした目でこんなことを言うから：

「俺は、その人以外見えない位の完全燃焼できる相手が欲しいんスよね」

急に何を言い出すの：と思いながらも、かっこいい——：と私達3人とも一瞬そんなクサイセリフを堂々と言う沢田君に魅せられてしまった。

：——時だった。

「……えゝもう一人、紹介します」

え？まだいたの新人社員：てゆうかまだいたの人事部の人：そうしてみんながどよめく中、人事部の人は気分よく話し始める。

「この1年、開発部の主任は不在としていましたが海外勤務を終えられて本日付けで正式に就任されました：」

主任がそろそろ来るとは聞いてたけど、私達の直属の上司かぁ。どんな人なのかな？

「——失礼します。」

そう期待を胸にドアに向ける視線
そして入ってきた背の高い男の人の姿に、一瞬で目が釘付けにされる。

え——…うそ——…

新主任として紹介されて現れたのは
昨日、街中で熱烈なキスをしたあの彼。

覚えてる…何にも動じないあの瞳
キスをしている時でさえ乱されない自信に満ちたあの姿勢

2度でも偶然が重なれば、運命って呼べるのかな？
妄想に更け出したら、もう人事部の人の話も耳に入らない。

「この方は、暫く海外勤務されていて：—」

昨日は暗くてハッキリとは見えなかったってゆうのもあるけど
こう見ると…こんなにキレイな顔した人だったんだ
なんて私がポーツと彼を見つめていると：

「ちよかつこいい！あの人お♪」

イケメンアンテナだけは鋭い！
またもや絵里花がすかさず強力ながつつきを見せるものだから
あの人だけはヤメてーっ！！
そう心の中で叫びながらまた彼を見ると、視線が出会う：

なのに彼は私の姿に驚いた様子もなく顔色一つ変えずに平然と私を
見ている

ジツと…あの切れ長の目で私の目を射抜くかの様に…。

昨日の今日で私を覚えてないってことは無いと思うけど

何でそんな冷静な瞳でいれるの…それが余計私の心をざわめかせていった。

——それもすぐに、違うざわめきに変わるのに…

「…という訳で今日から主任の桜木 アキ君だ。宜しく頼むよ」

『…ま、って…桜木…アキ——？』

「桜木” って、もしかして…みゆのお兄さんとか？………みゆ？」

呟いた小さな声は震え出し

奈緒の声だって、今の私の耳には届くはずもない。

昨日の人が、アキ——？うそ、でしょう…？

あまりに予想外の事実には私はすぐに状況を飲み込む事ができずにみるみるうちに視界が狭まっていく：

「…大丈夫？みゆ顔真っ青だよ？」

『うん…ちょっと、驚いただけ…』

奈緒が心配そうに私の顔を覗き込んで顔色を伺うものだから一応の口を動かしてみても、思考の歯車が巧く噛み合わない。

昨日の彼はアキで…今あそこにいるのもアキで…

私、アキに恋に堕ちそうになったの…？お兄ちゃんの、アキに——？

そういえば何となく面影が…。

それよりも何よりも：お兄ちゃんとキス——っ：
アキが帰って来た事は嬉しい事のはずなのにものすごく、複雑な気分…。

出会って恋に落ちそうになってキスまでしちゃって運命の再会をして：

実は兄でした…：なんて失恋にも程があるよ…。

「…と言う事で、桜木 みゆ君。

兄妹でやりづらい事もあるだろうが仕事に励んでくれよ」

『…は、はい！』

ええ、やりづらいですとも…やりづらさマックスだよ…。

「——宜しく？」 桜木」

さっきと変わらずに私を貫く何も語らないアキのブレない視線
驚く様子もなく毅然と立っているその冷静さ。

その力才は、昨夜の「男」でもなく「兄」でもなく…紛れもなく「上司」

アキは：驚いてないの？それとも、知ってたの…？

私は兄妹と知った今でも胸は締め付けられたまま——ドキドキが、消えないよ…。

…それでも。

絶望的な失恋の切なさのアキとの関係の気まずさが喉元をカラカラにさせても。

私は喉の奥から一生懸命言葉を発した。

『——よろしく…お願いします。』主任…』

#2 運命のイタズラ ―?―

side アキ

――久しぶりの東京だった

辺りを見渡せば箱詰めにされた景色、都会独特の薄汚れた空気
それは、中学卒業以来ずっとロサンゼルスで生活して来た俺に少々
息苦しいが

それと同時に暖かさに包まれる懐かしさもあった。

あれから13年間日本に帰って来ていないんだ
故郷が恋しくなるのも必然だろう。

無論、その間も家族の事は気になっていたが
時々兄貴がくれるメールを読むと皆元気そうで
俺がいなくても父さんや兄貴に任せておけば大丈夫だ、と思ってい
た。

そもそも、長期留学やロス支社の入社を望んだのは俺自信だ
後悔はしていない。

：―――そうして、ロスでの仕事も終え、

明日から新宿本社企画開発部・主任として赴任する事になった。

ようやく日本で働ける、ロスでの経験を存分に活かす事が出来る
そう：俺はビジネスの為に帰国したんだ。

その仕事の打ち合わせも含め

今日はこれから兄貴と食事をする事になっているが

その前に新宿の本社ビルを先に見ておこうと少し寄り道をしていた。

『東京の夜はまだ少し冷えるな…』

等と、高層ビルと共に相当振りの東京をしみじみと肌で感じていた時
歳の割に男慣れしていなそうな綺麗な顔立ちをした女と接触するが…

——これを一目惚れと、呼ぶのなら。

「偶然」が「運命」をもたらしたとしか思えない。

俺を見つめる真っ直ぐな瞳に。

戸惑いながらも反らされない微睡みの揺れる瞳に。

何故か懐かしさを超えた愛おしさを感じ、気づけば彼女の唇を奪っていた。

一度唇を合わせると

物欲しげな少女から女の顔に変わっていくサマに悉く欲情が煽られ
その漲る欲望を打ち消す様に…何度も、何度も。キスをした。

いつの間にか、彼女を…離せなくなっていた——

今まで女に不自由した事は無い

俺にとって女は居ても居なくても、どうでもいい存在だった。

寧ろ面倒だけで女に情や執着心を持つ等あり得ないと、そう思っていた。

——なのに、何故なんだ…

運命だからか？罪の扉を叩いたからか？彼女は俺の心を一瞬でかき乱す：――

ただの一夜の出来事、そんなの今まで沢山あったじゃないか
俺はどうかしていたのだろうと、別れた後いくらそう自分に言い聞かせても

この唇に彼女の温もりが残って：仕方なかったんだ。

帰国したばかりの俺には連絡手段がまだ無かったばかりに
もう二度と会えないだろうと思っていたが：こんな運命ってあるんだな

――みゆ……。――

やがて：彼女の事が頭から離れないまま
少し送れて到着した、兄貴との待ち合わせの小料理屋

「よぉ久し振りだな、アキ」

相変わらず軽い口調の兄貴も俺も
13年となるとさすがに歳をとったなと感じた。

「母さんには連絡したのかあ？」
『いや、今夜は遅くなると思ってホテルに部屋取ったんだ。
実家には明日行くつもりだ』

：男兄弟なんてこんなもんだ。

13年も離れてたとは言え、ビジネスと家族の事以外話題が無い。

「みゆもいい女になったぞー？ お前明日からの配属開発部だったよなあ？」

みゆも去年からそこにいんだよ」

『妹と一緒に職場か：みゆも変わったんだろーうな
俺の知ってるみゆは小学生までだもんな：』

その他に兄貴と話した事と言えば、兄貴が結婚した事や俺の女の話。

「アキお前、今女いねえの？ あっちに置いて来たんか？」

『…どの女も続かなくてね。女も恋愛も俺には必要無いよ…』

「相変わらずだな：お前。」

言い寄ってくる女は昔から腐る程いたのにも興味無い顔してたしなあ。

本気になれる相手が出来れば、アキも変わるんだろうがな」

「本気」か…。

女に冷めた情しか向けられない俺には、一生無縁の話だろうとそう、確信じみた自信に満ち溢れていた…この時は。

『…兄貴は今の奥さんがそうだったのか？』

「…まーな…。」

しかし、兄貴にも煮え切らない様子が伺える

兄貴も色々ワケありか：

『みゆか…』

けれどそんな事が気にならない程、妹との再開に期待が膨らんでい

た。

あの泣き虫癖は直っただろうか
この歳になっても尚、ブラコンが抜けず俺に執着するのだろうか。
俺が直属の上司になると知ったら：みゆ、びっくりすんだろうな：

——そんな淡い笑みをも吹き飛ばした：赴任当日。

妹の記憶を辿りながら開発部の扉を開けると
衝撃的な事実が俺を突きつけた。

みゆが：昨日の女——？マジ、かよ…

みゆが驚きを隠せない表情を俺に向けている
顔には出ない様気を張っていたが、俺も十分驚いていた。
まさかあんな形で妹と再会してたとは…と。

妹に手を出してたのか、俺は…。

『よろしくお願いします』

そう気まずそうに言うみゆを見て：いや、妹と分かった今でも。

——俺の心は限りなく揺さぶられていた。

程なくして：自己紹介を終え、一息つく間もなく案内された主任室は
部下が働くオフィスとガラス窓で区切られた広めの個室。

しかし、人事部の佐藤部長が色々と説明をしてくれていても

俺はみゆの事が気になって仕方がなかった。

まさかみゆがあそこまで女になっていたとは：
妹に欲情して：何やってんだ、俺は…。

俺の辿っていた妹の記憶は、予想を遥か越えた形で目の前に現れる。
俺の中での妹のみゆは、まだ俺が留学する前の小学生のままだったんだ

いつもあどけない笑顔で寄って来ては

俺や兄貴が遊んでくれるのを期待の目を輝かせて待っていた。
寝る時には本を読んでやらないといつまでもゴネる様な甘えたな妹だったんだ。

それが：あんな女の顔をする様な歳になったんだよな：

経った年月を考えれば当然の事。

それでも、昨日の：「女」のみゆが頭をチラつかせて
離れようとはしてくれない。

昨日の事は忘れて俺は兄として上司として接していくべきなんだろうが

正直気持ちのやり場に困っていた。

しかし、俺達が血の繋がりを持つ兄妹である以上そう割り切るしかない。

——兄妹と言う事実。

それは、生涯ねじ曲げる事の出来無い……”絶対的な関係”

夜、実家に寄ったらなるべく普通に接しよう

何事も無かった様に接すればいい、何も無かった事にすればいい

兄である俺がそう強いなければ恐らく、兄妹の関係諸共こじれていくだろう。

みゆをこの事で悩ませたくは無い。

それは妹への思いやりか、はたまた己のあらぬ感情を抑える為か。

『お前は、変わったな…みゆ…。』

……主任室と部下の隔たりのガラス窓

何人も社員がいるのにも関わらず、俺にはみゆしか見えていなかった

あのサラサラした腰までの長いストレートの髪も

あの透き通る様な白い肌も：薄紅色の柔らかな唇も

俺にはもう二度と、触れる事は叶わない。

そう思えば思う程みゆを妹として目に映す事が出来なくなる。

——”みゆは妹だ”

唇をかみしめながらそう何度も繰り返し、自分に言い聞かせた。

#3 運命のイタズラ ー?ー

side みゆ

——新主任の挨拶を終えたオフィス
——通常業務に戻る社員たち

その中で私は当然ながら、全く仕事に身が入らなかった。

アキが上司で、お兄ちゃんでは…

そう頭の中に現実の水玉を落とした数だけ、視線は落ちていく

「みゆう？ さっきの新主任でえみゆのお兄さんのお？」

『うん：2番目の、ね…』

「そおなんだあ！ ちよーかつこいいじゃん♪

専務と言いい新主任と言いい美形兄弟って感じ！ 歳いくつ？ 彼女いるのかなあ？」

だから元気一杯の声が突然湧いて出て来ても

絵里花がアキにどれだけの興味を示していたとしても

曖昧な対応しかできない。

そんな時：絶好のタイミングで絵里花を連れ出してくれたのが奈緒。きつと俯きがちな私の心中を察してくれたんだろうな：

奈緒ってね、人並み外れた洞察力を持ってる上にさり気なく気遣い
が出来る人なの

こんな時はしみじみ人間のできのよさを感じる。

…：それより、どうしよう私…

これからアキとどう接していいか分からない。

帰国したってことは、これからは実家で一緒に暮らすってことになるの？

一緒に職場ってだけでこんなにも同様しているのに：

まさかのまさか、四六時中アキと同じ空気を吸うことになるの？

この日は朝の挨拶以来オフィスにアキがいなかったからまだよかったけど

明日から私、やっていけるのかな：

そんな事を考えているうちにも時は進み：就業時間を越え
大きな不安を抱えたまま、そろり実家に帰宅しすると
予想通り、お母さんがルンルンで台所から顔を出す。

『ただいまーあ…』

「おかえりなさーい、みゆ！待ってたのよお♪」

だよね、アキが帰って来たこと聞いたんだろうな：

13年振りに息子と再会出来るんだもん、嬉しいに決まってる。

なんて、まるで他人ごとのようにコクコク頷いては

上着を脱ぎながらいつものように居間に行くと：

夕ご飯が並べられた食卓には、——アキが座っていて。

何でっ：何でアキがいるのっ！？

こんなことは簡単に予想出来ていたのに、この胸は過剰反応をする
気まずさとゆう息苦しさと共に…。

「みゆは会社で会ったらしいじゃない？

アキ急に帰ってくるんだもの。ほんと嬉しいわぁ」

お母さんが久し振りに見せる満面の笑み
私だってあんな事さえなければお母さんみたいに素直に笑っていたのに

運命ってほんとう、イタズラ……。

「アキったら見ない内に随分と紳士になっちゃって！
お父さんに似たのかしらね♪」

……そんな一杯一杯の私に追い打ちをかける絶体絶命のハプニング。

「……あら？ お醤油きらしちゃってる！

お母さん買って来るから先に2人で食べてなさい」

『あ、それなら私が……』

嬉しさと足の浮いているお母さんにストップをかけられず
瞬きをしている間にも外へと出て行ってしまうお母さん
ダイニングに残された……アキと、私。

——2人の間に漂う空気は、兄妹から限りなく遠のいていた。

耳を打つのは、心拍より遅い時計の秒針音
胸を打つのは、宛先不明な鼓動

昨日キスを交わしてしまった男の人が
当たり前のようにお兄ちゃんとして家にいる
その違和感に動揺してどうしても体が固ってしまう。

「定時で上がったんだろ？今まで何処ほつき歩いてたんだよ……どうした？座れよ」

程なくして交わる視線：その先は目より唇。

このままじっとしていたらどうにかなってしまいそうで顔から目線をずらしてアキの隣に座ったはいいいけれどいくらお兄ちゃんの面影を辿っても

その先は昨日の熱く鋭い眼差しに辿り着く：

どうしよう：意識しちゃいけないって思う程心臓がゆうことを聞いてくれない。

このままだと意識してる音、アキに聞こえちゃう：

だからとりあえず目の前のお箸に手をつけてみたのになるべく大きな音を立てて握ったのに

「みゆ——？」

真横から響く低音が昨日の熱い吐息と重なって動揺が手を震わせる

——カシャン……

あ、お箸が……だめ、もう耐えられないっ。

「久し振りのアニキに何、動揺してんだよ……」

けれど、動揺丸わकारいの私とは裏腹に、隣りから漏れたのは呆れ言葉に薄い笑み

まるで昨日のことを無いものとする冷静すぎるアキの素振り。

アキはどうしてこんなに普通でいられるの!?

昨日の件に触れたくない気持ちは同じだけど、それにしてもスルーしすぎだと思う!

アキは、何とも思っていないのかな…?

そう思えば思う程、意識しすぎていた私と

何事も無かったかのようにアッサリしたアキとの態度の差に
だんだん腹が立ってくるよ…

むしろ、こんな事でお兄ちゃんに意識してる自分に泣けてくる…。

『…13年ぶりなんだからしょうがないでしょ…』

「ばーか。」

そう言ってアキは、ご飯に目を映しながらも柔らかく笑っていた。

あ——覚えてる：アキのこの微妙な笑み。

常に堅い表情しか見せないアキが、ほんの少し心を軽くしてくれる瞬間

もしかしてアキは兄妹の関係をを大事にしたいから

あえてあの事には触れないのかな?

妹の私を大切にしてくれたから、困らせたくないから、そうしてくれてるの?

——うん、昔からそうだった

アキは口数も少ないし極端に素っ気ないけど

目には見えない思いやりが時折顔を出す
だからその、”たまに”の一瞬がとても優しく感じたの。

アキ、変わってない。私の大好きな、お兄ちゃん――。

気まずさ混じりの緊張もほぐれ

相当久しぶりにアキとお母さんと囲む食卓

タカにいが結婚して出て行ってから寂しがっていた：空の椅子に灯る暖かさ

やがて：再会を祝う団欒にピリオドを打ったのが、お母さんのお願いで。

それは一人暮らしを希望しているらしいアキの部屋が決まるまで実家で一緒に暮らす：とゆうものだった。

長期に渡り家を空けていたことに負い目を感じていたのか
アキはそれに快く承諾。

気まずさの薄れた私にも、少しばかりの嬉しさが芽生えていた。

「：――母さんもう寝たのか？」

『うん、横になってすぐ寝ちゃったみたい。』

アキが帰ってきてきて相当はしゃいでたもんね？

久しぶりに見たな：お母さんのあんなに嬉しそうな顔…』

……そうしてお月様が夜空のてっぺんに昇る頃

食事の後片付けをしている私の傍らで

アキは缶ビールを片手にソファでくつろいでいた。

『…私も飲もうかな♪』

「そうか：みゆも酒飲める歳か。信じられないな…」

『もう13年経つんだよ？私だって成長するって。』

「それもそうだな：」

だから冷え冷えのビール缶を片手にアキの横に座してみると言葉少なめなアキが少し笑いながら私の頭をフワツと撫でる。

もう私子供じゃないって、アキ：

『でもビックリしちゃった：アキが開発部の主任なんて。

もっと上の役職に就くんだとばかり思ってたから：』

「ああ、主任は本社に慣れる為のほんの腰掛けなんだ。

直に常務辺りに異動になるだろうな…」

『…やっぱり。アキもタカにいと同じ、出世街道まっしぐらだね？』

でも。ずっと会ってなくても不思議と普通に話せるもの。

あんな事もあったけれど、アキと私は間違いなく兄妹なんだもん家族って、血縁の絆ってこうゆうものなのかも…。

『そうだ！タカにいは会ったの？』

「ああ、昨夜会って飯食ったよ」

なんて気が緩み切っていたものだから

無意識に自分から地雷を踏んでしまっていた。

——昨夜…って：キスした前？後？…この話の続き、どうしよう！

「：早い時間から飲み過ぎたよ、酔っててあんま覚えてないんだ」

：——アキ……？

『そ、そっか：アキお酒強そうに見えるのにね？』

けれど、何気なく：うまい具合に逸れていく話題

アキ：気を回してそう言ってくれたのかな？

そうなんだ：酔ってたって：え、まさか昨日のあの時酔ってたの？
ならキスは酔った勢い？：酔ってて単に覚えてないだけとか……？

なあんだ、そうなんだ：。

それなら気にすることなんて全く無かったのかもしれない。
アキがそう、言うのならば……。

『ねえアキ、今度タカにいと3人で飲み行こうよ♪』

「へえ：みゆそんな飲めんのか？」

『タカにいに鍛えられてるからお酒には自信があるんだあ』

どれだけ離れてても、兄妹は兄妹なんだよね？

それは生涯覆すことのできない——絆——

昨夜のハプニングはそつと胸に閉まって

これからで一杯にしていけばいいんだよね：大人の対応を。

そんな脆い志、すぐに砕け散るのに——：

——そして時の流れに身を任せ：アキとの安定した新生活、数
日後の朝

出社するなり絵里花がお花畑を背負って飛んできたと思えば
いきなりの積極的発言にびっくり。

「ねえ、みゆ？！私いお兄さんにアタックしてもいいかなあ？」
『え！——アキにつ？』

そう言えば絵里花ったら
主任挨拶の時からアキに物凄く食いついていたんだっけ：。
そう思い出し納得をしているうちにも、2発目の衝撃が胸を叩く

「何かあ：一目惚れしちゃってえ
ってゆうかねえ！実は主任が来る前の日の夜
会社帰りにすぐそこで主任見かけたんだよねえ」

アキが来る前の日ってあの日？”すぐそこ”って会社前？
キスした時の：な、なんですと！？

『み、見たって：アキを？な、何してたのかな、アキは？』

もしアレを見られていたら：そんな動揺から
確実に怪しくドモリながら恐る恐る聞いてみたけれど

「会社の前に立っててねえ！私は通りすがっただけなんだけどねえ」
『そ、それだけ？』
「それだけけどお。何かその時ビビーツときちゃったんだよねえ
？」

運良くアレは見られていなかったみたいで、ホッと胸を撫で下ろす。
だって、兄妹で：なんて世間からしたらたとえキスだけでも――

――禁忌

「って、みゆ？聞いてるう？ビビーツとだよ？ビビーツとお」

『んー。私に聞かれてもー：

でも絵里花が本気ならいんじゃないかな？』

「ほんとお？ほんとにいいの！あたし頑張っちゃうよお♪

彼女とかいないよねえ？ねえみゆう？」

うん。あのことはたとえ友達であっても絶対に言えない：。

そんなことばかり気にしていたから焦るあまり適当なことを言ってしまうって

その直後にちよっぴり後悔が襲う。

あの日のことはもう私の中でも整理がついてるし

アキとの関係も気まずく無くなった。

でも：何だろう：この胸に広がってゆくモヤモヤした気持ち。

飽きっぽい絵里花だからなのかな？

アキを取られたくないって気持ちにもなってる：

13年経った今でもブラコンが抜けていないだけ：ならいいけれど
：。

――私も気づけない心の水面下で

アキに猛アプローチをかける絵里花の存在が
秘めた想いに拍車をかけていた

「禁断」へと、導く：その。想いに――

異様な胸のざわつきが向かわせる：アキへの視線

部下と間仕切りをされた主任室

ブラインドのほんの隙間から見える上司の顔

アキ、随分頼もしくなったな：

昔は肩幅あんなになかった、私を抱き留める腕も胸板も見違える程に逞しくて：

妹の私には一生見れなかったかもしれない男の人の顔があつて：会つても全っ然気づかなかったもん：あ、これ笑えない：。

――もし兄妹でなかったら。

私は、きつとあなたを：：

「：――みゆさん？この書類確認して欲しいんスけど」

『…あ！うん：』

その危ない妄想を止めてくれたのは、新入社員の沢田君で。

年下だからなのかな、この体育会系の口調がとても新鮮で

彼のスマイルはいつも爽やかで、自然と心を和ませてくれるの。

「あの：みゆさんで彼氏、とか！いるんスか？」

『どしたのイキナリ？残念ながないよー？』

オーラはいつもぼかぼか。話しやすくて：会話もよく弾んで：

「ホントっスか！俺、実は：みゆさんに一目惚…」

『あっ！！ここ間違ってる。一緒に確認しにいこっか』

「：はい！お願い、します…」

——きつとアキとは、正反対のタイプ。

「：——ねえ奈緒！沢田っちってさあ

みゆにばーつか仕事の事聞いてるよねえ？」

「何よ、絵里花やきもち？」

ありやどー見てもみゆに惚れてますーって感じじゃない？」

——ねえアキ。この時からもう全ては始まっていたのかな？

「やあっぱりい？沢田っちはみゆ狙いかあ。

鈍感おとぼけ・みゆは全然気づいてなさそお」

「アンタさ、さっき主任がどうかみゆに言ってたけど：

身の程わきまえなさいよ…」

「ええっ！だって主任モロタイプなんだもおん！絶対モノにしてみせるよお♪」

——恋も、友情も、私の知らない所で色々な人の想いが動いていた。

「主任てどこも重要だけど：みゆのお兄さんなんだから！

お願いだから、こじれる様な事だけはやめてよね？」

「ええ：それは奈緒ぢゃあん！

あたし知ってるんだからあーみゆのお兄さ：専務とおコッソリ会
ってるの♪」

「……………」

この時からみんなの歯車が少しずつズレ始めていたことなんて
今の私はまだ、気づく気配すらなかったの――。

#3 運命のイタズラ ―?― (後書き)

早くらぶらぶさせたい…ボソッ。

#4 運命のイタズラ ―?―

side アキ

——それは、13年振りに実家の敷居を跨いだ時の事

俺の成長を物語っているのか、記憶よりも数段家が小さく見え
まるで幼少の頃をここで過ごしていた事が夢の様にも思えた。

思い出すな：——母の味、子供にも容赦無かった父の威厳
面倒な事は全て弟の俺に押し付ける兄貴の狡賢さ

そして、まるで金魚のフンの如く俺の後をくつついていた妹の可愛さ

『ただいま、母さん：』

「アキお帰りなさい！タカに連絡貰ってビックリしたわあ。

これからは永久に本社勤務なのでしょう？やっとな家族が揃うのね

♪
」

そんな温かな記憶を振り返りながらもインターホンを押すと

少し涙を浮かべながら俺を迎え入れてくれた母さんは

嬉しさ満点の笑みで、おかずが沢山並べられた食卓に俺を座らせる。

母さん、少し背縮んだか？：俺の視点が変わったのか：。

そうして懐かしさを胸に居間を見回している内にもみゆが帰って来る。

俺が此処に居る事に、明らかに戸惑っている妹が。

意識してんの丸出しで、居間の入り口で不自然に立ち尽くしている
：女が。

そんなわかりやすい顔するなよ：

普通でいようと決めたのに俺まで釣られそうになるだろ？

ああ顔色変えずにいる事も何も感じていない素振りをする事も

元々感情を表に出す事が苦手な俺にとっては朝飯前。

言動に現れる位動揺する出来事等、今まで皆無と言っている程俺の人生には無かった。

だから今日だってこれからだってやっていける…。

そう固く志す兄の傍らで

俺の男は、みゆの前でいかに兄貴を演じ切るか：終始それしか頭になかった。

ただでさえ長期間離れて暮らしていたんだ：接し方に戸惑うばかり。兄貴っぽくするにはどう話を切り出せばいいんだ：？

——必死だったんだ、この俺が。

しかしみゆは、俺があの子の出来事に触れない素振りも

俺が普通に兄貴を演じている事も、みゆなりに良い解釈をした様で母さんが寝付いた頃には俺への態度が普通になっていた。

「ア——キ♪アキのベッド、シーツ新しいの替えてといたよー？」

『随分と気の利く妹になったもんだな…』

「うん：もう大人だもん——」

これで…いいんだよな…。

みゆが寝た後も、俺はまだしばらく寝付けずにいた。

寝不足が祟りそうな——翌日の朝

主任室の整理もしなければならぬ為、みゆが起きる前に家を出た。

そして会社に着いて主任室に入ろうとすると、現在朝6時半：

こんな時間からもう電気が付いてるが故に、恐る恐る開発室の扉を開けると

驚かせんなよ：今年の新入社員の沢田が居た。

「主任！おはようございます」

『随分早いな、こんな早くから何してるんだ？』

「いやー昨日飲み過ぎちゃいました」

気づいたら始発だったんでそのまま来ちゃったんスよ」

『…そうか——』

入社早々呆れた奴だな：まあ仕事に支障をきたさなければ俺はそれでいい。

等と完全に沢田を横切ろうとした時：不意に足を塞き止められる。

「主任とみゆさんが兄妹ってほんとっスか？…似てないっスね」

——”兄妹” そのありふれたワードが、痛く胸に響いたんだ。

『ああ、本当だ。もういいか？沢田、顔でも洗ってこい』

主任室に入り椅子に腰掛けた俺には、どうにもならない希望に囚われる。

——もしみゆが、妹でなかったなら……。

「…主任、失礼して宜しいでしょうか？」

『——どうぞ：』

：やがて気づけば就業時間開始の8時

昨夜寝れなかったせいか、どうやらウトウトしてしまっていたらしい。

書類の整理するつもりが：もうそんな時間か：

そう自己嫌悪に陥っている間にも、主任室の扉は開かれる。

「——失礼します」

寝起きの顔からすぐさまビジネス対応のマスクに切り替えた俺
おずおずとしながらも主任室へと足を運ぶ、緊張気味のみゆ
みゆは遠慮がちに、ソレをデスクの上に置く。

「あのね、これお母さんからアキにつて。アキの分の家の鍵…」

兄の俺を上司扱いしているその辿々しさが初々しい
男の俺に意識して恥らっている姿が何ともいじらしい

これは妹への愛情か、否、女への慕情か——。

『みゆ：？ここでは俺は”主任”だ、そう呼べよ？』

「あ、そう：ですよ、すみませんでした：」

そんなヤキモキした胸の内を少しばかり見せてしまったせいか
みゆは顔を赤らめて会釈をして出て行くが

注意しておきながらも、俺も”みゆ”と呼んでたよな…

実家に帰ればみゆが居る、出勤してもみゆが居る
いくら目を背けても、俺にしたら妹のみゆは永遠だ。

消し去りたくも消せない記憶とは、どんな運命のイタズラなのだろうか――。

しかし、それからと言うもの本社勤務の日数の浅いせいか会議だらけの日々
良い具合に多忙を強いられた事で気を紛らせていたある日の午後
主任室に訪れたのは、確かみゆの同僚：みゆの親しい友人らしき女
だった。

『何か用か？……名前は：』

「木村 絵里花です！えっと：明日の夜なんですがあ

部署のみんなで主任の歓迎会をしたいんですけど主任ご都合はい
かがですかあ？」

仕事が出来ない上に典型的なブリッコ女か？

しかも集団行動は苦手なんだ、いや面倒臭い：しかし

『いやいい、そんな気を使うな』

「いえっ！もうみんなもおその気になっちゃってえ。

主役の主任に来て頂かないとお」

……と押され、仕事上これから付き合っていく部下達の誘いだと思
うと

断り切れなかったと言うのが最もらしい言い訳で。

「あの、主任：」

『まだ、何かあるのか？』

だからなのか、調子づいた木村さんは

もじもじとしながらも言いづらそうに次の話を切り出す。

「主任は：今彼女とかいらっしやるんですかあ？」

『いや、いないけど？もう5時過ぎてるから帰っていいよ、お疲れ様。』

仕事場でプライベートの話をする等、言語道断。

これ以上話がのびるのが面倒でそう突き放し、木村さんを帰らせたんだ。

愛だの恋だの、本当に女ってそう言うの好きだよな：

そんな呆れた溜め息を零しながら：

——それでも。俺にも例外があつたんだ。

「：——アキ：しゅに：っ：タカにいがね、この後3人でご飯食べに行こうって」

何を遠慮しているのか、数センチ開いた主任室の扉から顔半分をチラつかせたみゆ

それは軽くホラー映画に似た演出。

けれどビジネスモードを纏っていた俺の表情は、確実に緩んでいた。

『もう少しで資料が片付きそうなんだ：先に行ってろよ——みゆ』

そこに在る情の種類等、考えたくもないが

昔も今も特別なんだ、——みゆだけは。

「：——アキー！こっちこっちー！！」

程無くして向かった先は、兄貴馴染みの創作ダイニングバー
店に入るなり、遠くから俺を呼ぶ：透き通った声
それに引き寄せられ席に着くと、酒を飲んでるせいか
みゆはほんのり頬を赤らめて無邪気に笑っていた。

「よう、アキ！こんな時間まで残業してたのかぁ？」

既に始めていた晚餐を意味する皿の数

徳利両手に軽く俺を気遣う兄貴：オヤジかよ：。

日本酒：それでみゆはこんな顔してんのか：

『兄貴、みゆにあんま飲ますなよ。明日は平日なんだ、仕事に響く
だろ』

「お酒自信あるもん！大丈夫、大丈夫♪で、アキは何飲む？」

兄二人に囲まれているからか、仕事では見られない妙に甘えた声
酒を含んでいる故にやけに潤んでいる瞳

拳句に俺の顔を覗き込む様にして見つめる：不意の上目遣い

男心を擦る女の仕草とは、こう言う事を言うのだろう。

「……？？アキーい？」

『ああ、とりあえずビールで』

危ないな：兄貴がいなかったらまた俺は：

そう平常心を取り戻し、みゆに触れそうになっていた手を箸に置く。

「みゆ、お前まだ男できねーのかぁ？もう2年近くいねえだろう？」

家族一のムードメーカーである兄貴は、昔と変わらず妹思い
妹のみゆにしたら兄貴は、絶対的な信頼を寄せている相談役

「ん？友達に誘われてよく合コンとかは行くんだけどねー
なかなか発展しないんだなぁコレが：」

そして俺はそんな二人のやり取りを静かに聞いている事が多かった。
昔から：それは変わらない、変えられない関係。

「俺は知ってるぞ？みゆが断ってるだけなんだろう？
お前も男でも作ってもっと女らしくなれ？もっと色っぽく、な
あ。

アキもそう思うだろう？」
『ああ、そうだな：』

だが俺は知ってるんだ、兄貴：
男の前ではみゆが十分女の顔をすると言う事を
色気なんかどうでも良くなる位、俺を惑わす瞳を
絶対的な関係をも破壊する威力を兼ね備えた、欲情の蓄を――：

「いーもんいーもん。そのうちね
このままの私でも良いつて言ってくれるヒーローが現れるんだも
ん：」

「待て待て、それは漫画の世界だろう！お前は本当可愛いなぁみゆ

」

——しかし、不思議なもんだな：

こんなに時間が空いている兄弟だが

いくら離れていても、いくら会話ができなくても

こうして会って話しているといつの間にかまた元に戻れている
家族とはきつと、そう言うものなんだ。

そう思って俺の横で笑っているみゆを見ると

俺の中での「家族」と言う言葉に違和感を感じたが

この時の俺はまだその事を、認められずにいた。

「：——アキは暫く実家住まいだろう？てな事でみゆをよろし
くなー！」

久しぶりの兄弟水入らずでつい長居してしまったが：

時は進み：店を出た時は既に12時を回った頃

兄貴はそう一言軽く口にし、一人タクシーに乗り去って行く。

兄貴が飲ませたんだろ：最後まで責任取れよ。

『：みゆお前、酒強いんじゃないのか？』

「アキ弱いって言ったクセにー！」

こんなに強いと思わなかったーウソツキー！！」

そう：兄貴と同じペースで日本酒を飲んでいたみゆは案の定

酔っぱらい街道まっしぐら、足を覚束せながら俺の前をフラフラと

歩いている。

あれだけ飲んで潰れない時点で本当に酒には強いらしいが、明らかに飲み過ぎだ

そう仕方なしにみゆの体を支えつつ、タクシーを拾おうとしていると意外にもまともな話題が風を靡かせる

「…ねえ、アキって今カノジョいないのー？」

『…いないけど？』

「ふうん。ねえ、同じ部署の木村絵里花って知ってる？」

絵里花がね？アキに一目惚れしたんだってー！キャッ

『へえー…』

俺にしたらどうでも良い、友人への気遣いが溜め息を促す

「…アキっていつもそうなの？」

『何がだよ？』

「何言っても素っ気ない感じでーいつも眉間にシワよせて話すし何があっても冷静さ崩しませんて感じするしー」

『——お前、飲み過ぎ。』

「答えになってないーい！アキ冷たーい！」

他愛もない話をしているだけでどうしようもなく、男心を擦っていく…

子供みたいな奴だな…こんなみゆも、可愛いな…。

無邪気に笑う顔も、怒った顔も、困った顔も。

どんなみゆの表情を見ても俺には可愛く見えて仕方がなかったんだ。

——そんな邪心が、俺の歯止めを取っ払ったのかもしれない。

「…あつ——キャアツ!!」

よろめいたみゆの体を間一髪で受け止めたこの腕が
甘えたなその瞳と出逢ってしまったこの目が

「ア——キい、だっこして？」

泣き出しそうな程、みゆに傾いていく——…。

極めて華奢な体に、偶然にもこの手が捉えてしまった…柔らかな胸
の感触。

それが余りにも大切に思えて…愛しすぎて。

みゆが酔っている事を良い事に気づけば…柔い胸に置かれた手に力
が込もっていた

それはまるで…——女に愛撫をする様に。

「…ん——…あつ…あ、っん——…」

そしてこの耳を、欲情を、この上なく煽ったのは

兄の俺には生涯聴く機会もないだろう…甘く濡れた鳴き声。

このまま強く激しく…みゆが壊れるまで抱いてしまいたいと、何度
血迷ったか。

『…お前、感度良すぎだろ……』

…そして気づかされるんだ、妹へ向ける目でみゆを見れていない自
分に…。

そう確信した時には…いや、出会った時から全てが手遅れだった。

みゆを抱く手に女への愛しさが生まれていた――

…やがて家に帰りみゆを寝かせてからも

みゆを抱いた手がまだ火照り続けていて俺は暫く寝付けなかった。

分かっているんだ：

俺がみゆに女を感じた所で俺らが兄妹だと言うことは紛れもない事実。

それは誰にだってどうする事も出来ない。

今までも、女は適度にいたがさほど興味も湧かなかったんだ
ただ、会話と体を重ねるだけの関係で俺は十分満足していた
それ以外はむしろ面倒なだけだったんだ。

なのに…何でこんな気持ちにさせるのがよりによって妹なんだよ…。

俺の中でみゆを大事にしたい兄の気持ちと

男の欲望が渦巻いていた。

――故に、ある夜の就業時間後

飲み屋で開かれた主任歓迎会にて、固い筈の志が無残にも碎け散る事になる。

沢田はみゆに気がある様でアレコレとちょっかいを出していた

みゆの手を握り、髪に触れ：みゆにあんな顔をさせている：
気になって仕方がなかった。

許されないのは確実に俺だが：どうしても許せず
見るに見かねて、半ば強引にみゆをその場から連れ出した。

だが、あんな事を言うつもりは無かった

みゆを困らせたかった訳じゃない、泣かせたかった訳じゃなかった
んだ

ただ、自分への苛立ちとちっぽけな嫉妬でみゆを傷つけた。

形振り構わずさらけ出してしまった、男の俺
同時に失くしてしまった兄の信用

：——その時以来、みゆは暫く口を利いてくれなくなった：。

#5 破られたタブー ―?―

side みゆ

―― 久しぶりに兄妹水入らずで飲みに行った翌朝のこと

俗に”ザル”のタカにいに付き合っただけ飲んだのが間違いだっただよ：頭ガンガンする…

タカにいてもアキもほんとお酒強いんだから！

…って。あれ、おかしいな：この間アキお酒弱いって言ってたよね？そんな、この時はなんてことのない疑問を抱えながらも出社を果たす。

少しずつだけど、主任室からアキを覗けることに慣れて来ていてそして絵里花によるアキの情報収集も、お決まりになりつつあった。

「みゆう〜おっはよお♪」

『おはよ、絵里花。何かいー事でもあったの？』

「よくぞ聞いてくれましたあ！

実はねえ？今日の歓迎会の事で昨日主任と喋っちゃったんだ♪」

でも今朝はいつにも増してご機嫌で、目が一際キラッキラ輝いていて：

「主任てえ〜すんごくクールな人なんだね〜♪そこがまたグウ！
『……。単に素っ気ないだけだっただけだ。』

てゆうより、絵里花そーゆうの範囲内だったっけ？」

「ううん範囲外！相手にしてくれないとつまらないもおん！でもお主任は範囲内！」

『え：絵里花、話がよく見えない…』

「だからあ？初めてだけど主任にはドキドキしちゃったの♪
完璧恋に落ちたってカンジ？」

『そう、なんだあ…』

どうしよう：絵里花の不思議なテンションにもはやついていけない…
そんな苦笑いを浮かべていた私を救ってくれたのが
営業スマイルをキラッキランに輝かせている沢田君だった。

「みゆさんお早うございます！」

『おはよー沢田くん』

「みゆさん、今日の主任歓迎会行きますよね？」

『うん？もちろん』

両者一步も譲らない輝き対決

けれどやっぱり、絵里花の方が何枚も上手だったようで…。

「沢田っちさあゝみゆしか見えてないトコ悪いんだけどお

あたしもいるんだけどなあゝ挨拶して欲しいなあゝ」

「木村さん！居たんスカ、すみません！！」

……それにしても。

飽きっぽい絵里花にしてはアキに執着してるんだよね、本気っぽい
なあ

でもアキ昨日彼女いないって言ってたし、うまく…いっちゃうのか
な…。

『お疲れさまでした〜!』

――今夜は、主任歓迎会

定時を少し過ぎた頃、リクライニングの椅子を目一杯に倒して伸びをする。

そしてそのついでに奈緒と絵里花を探すけれど、姿が見あたらない。

代わりに目に飛び込んで来たのは、沢田君だった。

「みゆさん、お疲れさまです!

岩崎さんと木村さんが先に店行ってるからって、みゆさんに伝えてくれて」

『えー! 待っててくれてもいいのにー。薄情者ーっ!』

「…一緒に行きませんか?」

『うん、行こっか♪』

沢田君ってこうゆうところ気が利くんだよね

なんて、気持ちがあんなわかしていた私は、ひとり呑気だったの。

沢田君が今夜に勝負を懸けている、その精一杯の思いも

そんな沢田君に気を利かせて2人にしてくれた友達の思いも…気づかずに。

：――会社を出た沢田君と私は

少し距離のある飲み屋さんに着くまで、他愛ない話をしながら歩いていた。

でもね、沢田君と並んで歩いてるとどうも、社員たちの痛い視線を感じるの…

沢田君は容姿が格好いいってゆうのもあって

入社早々、女子社員の注目の的だったらしくって。

『みんなに羨ましがられちゃうなあ私：沢田君モテモテだから。女子社員に大人気らしいよ？』

「えっ、そうなんスか？」

驚いた様に沢田君は目をまんまるくしていたけれど、私より1つ下の割には

今時のやんちゃで遊び好きなイケメン容姿とは想像もつかない位中身は仕事熱心で強い芯のある男の人。

『大学時代もモテたでしょー？』

「そんな事無いっスけど：

ただ一人の大事な人に見てもらえないと意味ないんです：」

だからなのかな：そう言い切った沢田君が今まで見た事の無かった男の顔をしていて、少しドキツとする。

『——あっココのお店だ！』

「——：みゆ、遅かったじゃない？」

奈緒が待ちくたびれたとでもゆうように、タバコを吸いながら言う奈緒。

置いてったクセにー！

—— 歓迎会用に予約された飲み屋さん

集まっていた社員は全部で10人位なのだけれど
新設されて間もない部署だからこれがほぼフルメンバー。
私たちが一番最後だったみたいで、いよいよ歓迎会が始まろうとしていた。

「みゆさん、座りましょう！」

沢田君に手を引っ張られながらも見回す店内、確認してしまう…アキの存在。

アキは早くも席に着き煙草を吹かしていて

案の定、絵里花はアキの隣の席をちゃっかりキープ。

…やがて、絵里花の乾杯の音頭と共に、宴の席に賑やかさがどっと押し寄せる頃

歓迎会って言っても、みんなただ飲みたかっただけなんだよなあきつと…

なんて頷きながら、つついっつい周りを見渡していた。

絵里花はアキの隣で楽しそうに飲んで一生懸命アキに話しかけているみたいだけれど

カシスオレンジって！！つもビールガブガブ飲んでるクセに！

流石！合コンの女王…

一方奈緒は、先輩社員達と大人の雰囲気をも少しだして語り合っていた。

流石！オジサマキラ…

アキは相変わらず表情も変えないでしれーっと飲んでるし。

こうやって飲む席見ているとほんと人の性格出るよなあ。

そんな地味な人間観察を密かに楽しんでいた時

隣に座っている沢田君の長い前髪が、コメカミをサラリと撫でる。

「みゆさん、髪に糸が…」

『え、ホント？取って沢田君…』

「……取れましたよ！みゆさんて何か抜けてるところありますよね」

『そ、そうかな？初めて言われた…』

「そこがかわいいンスけどね」

……！！サラッと：よくそんな事が…

沢田君のあまりのストレートさに戸惑い、さらには少し照れてしまった：次の瞬間

「あの：みゆさん。今度俺とデートしてくれませんか…？」

思いもよらない出来事が、舞い込む――。

デート：？デートって…

あまりに唐突で率直な沢田君の誘い方に

とりあえずびっくりして直ぐに言葉が出て来ないものの

そんな真剣な瞳で覗かれてしまったら、断るものも断れないよ…。

「ダメ：ですか？」

『うん、いいけど…』

「ほんとっスか！？やったー！」

されには弾けた声を上げるものだから、思わず私まで嬉しくなっちゃう。

本当に：嬉しそうに笑う人…こう見ると何か可愛いかも…。

デートかあ…それは大学以来彼氏の居ない私にとっては、久し振りに聞いた響き。

アキとあんな事があって最近あまり息抜きできなかったし沢田君となら楽しいかもね？

『でも…私でいいの？沢田君ならどんな女の子でもきつと…』

「俺は、みゆさん行きたいんです。みゆさんじゃないと意味が無い」

また：男の人の顔だ…本当に、なんてストレートな人なんだろう清々しい程に言葉を濁さなくて、真剣さが真っ直ぐに伝わってくる正直に嬉しいって思える…

『ありがとう、沢田君。いつにしようか？』

…そうして、デートの日は明後日の日曜日になりその後はどこに行こうかとか、何食べようかとかアレコレ話していた。

一人では絶対に行こうと思わない場所、久しぶりの…男の人と2人きりのデートもちろん緊張もするけれど、どこことなく嬉しかったりする…。

「みゆ?! 飲んでる? 沢田ーちよいみゆ借りるね!」

…そうして大体の予定が決まった頃だったかな奈緒に連れられて、トイレにやって来たのは…。

トイレに入るなりニンマリした表情を向ける奈緒。
酔ってるのかな？と思えば…

「…で？沢田は何て？」

——相変わらず、鋭い…！

『…デート、して欲しいって…』

「へへえ！沢田もついに行動に出たのね？」

『え：ついにつて？』

「相変わらず鈍感ねーみゆは。」

沢田はずっとみゆが好き好きオーラ出してたよ？」

何かこう改めて口に出して言うのと恥ずかしいな…

って、え：全然気づかなかった…！

「みゆだけだよ？気づいてなかったのは」

完璧奈緒に心読まれてるよ：

『でもまだ会って全然日にち経ってないし、お友達として遊びに行くつもり…』

「”お友達”って…。好きになる時ってさ：時間とかそんなの関係ないんじゃない？

恋に落ちる時って本当に瞬間的なものなんだと思うのよね」

洗面台に腰掛けて足を組み、悩ましそうな顔を浮かべる奈緒。

いつも思うけどほんと大人…奈緒も：今の彼をそんな風に好きになったのかな…

『奈緒の彼は：どんな人なの？』

だから今まで何となく聞けなかった事を思い切って私は聞いたみたのだけれど

「そのうち：みゆには話すよ」

そう言った奈緒はとても深刻そうな顔をしていてとてもこの先を聞ける雰囲気ではなくて奈緒が話してくれるまで待とうと、この時私は決めたの。

「みゆは沢田の事男としてどうなのよ？」

『どうって：まだわかんないよ：でも、いい人だと思う』

「良い人” ってアンタね：もう中学生とかじゃないんだからさそろそろちゃんと恋愛しな？」

わかってる：わかってるけど…

「ちゃんと、男と向き合いなよ、この機会に沢田を真っ直ぐ見てみたら？」

好きになるかどうかは別として、何かが変わるんじゃない？」

『そう：だよね、私もちゃんと誰かを好きになりたい…』

「うん、頑張れ、みゆ」

奈緒の言葉は、一つ一つとても暖かく感じる：

だから友達の有難みと、経験者からの暖かいアドバイスをじんわりと心に刻めていたの。

「……岩崎さん。俺、用事あるから先帰ると皆に伝えてくれるか？」

——次に起こる、ある衝撃までは。

お店側から設けられた飲み時間は2時間半

今はまだ1時間を少し経過した位

その私たちが話を終えてトイレから出て席に戻ろうとした時

アキが壁にもたれ掛かってそこに立っていて、どうやら途中で抜け出す様子。

今夜の主役なのに：なんだ、アキもう帰るんだ：

「はい、わかりました。お疲れさ：」

——なんて少しばかりの落胆を感じていたのも束の間

奈緒が一礼をしないうちにも、アキは私の腕を強引に引っ張って歩き出す——。

えっ、え???：：——帰るって、私もー??

『ちょ：つと、アキ!?!』

アキはこっちを見向きもせずお店を後にするけれど

お店を出てからも私の手を強く引き無言で歩き続けてる：

ひたすら前だけを見て、私の問いかけになんて答えようとしてくれない。

そうしてアキに腕を取られたまま結構な距離を歩いたと思う。

この状況に耐えきれなくなった私はついに立ち止まり

思い切ってアキの手を振り払うと、ようやくアキは足を止めてくれた。

『ねえ、アキ！ちょっと：！手、痛い、離して！どう：したの、一体？』

けれど：アキはなぜか怒り口調で。

「お前：沢田と何話してた？」

ん？沢田君？？何でここで沢田君…？

『べ、別に：仕事の話とか、かな？』

アキも案外鋭いな：何となく恥ずかしくなってきた：場合でもなく

「——嘘をつくなよ」

アキが怖い顔で私を見下ろしている。

何で怒ってるの…、意味わかんないよ…

『アキだってお酒弱いって嘘ついたもん：アキに言われたくないもん！』

だからあまりに緊迫したこの空気をどうにか和らげたくて

少し茶化ながら言ってみたものの

なぜなの：この重い空気は和らぐ所かどんどん息苦しくなっていく…。

ましてや私のこの一言が：

アキにとんでもない言葉を言わせてしまう、引き金になってしまったなんて…。

「じゃあ、実家で飯食った夜、俺が酒が弱いつて嘘をつかずにあの日の夜の事を蒸し返せばよかったのか？」

『……っ”あの夜”って、ア、キ：？』

ちよっ：と：アキ：今、何て？

この話がまさか出てくるとは思わなくて私は驚き、固まるしかなく：

『ア、キ：？』

一回解き放たれた私たちの間で守られていた禁句^{タブー}それはは留まる事無く、アキの口でさらに抉られていく：

「：知らなかったとは言え、”兄妹で何度もキスしたよな”。
そう言えばよかったのか？」

な、んて事を：

何で：そんな簡単に言っちゃうの？なんで今更になって：

『：何の、こと：？』

何て言い返していいかわからなかった

分からない振りをしておけばどうにかなるなんて思ってた訳なんかじゃない

でも、それしか言えなかった…。

ねえ：今まで私の為に言わないでいてくれてたんじゃないの？
兄妹として私を大事に思ってた何も無かった振りしてくれてたんじゃないの？

そんな戸惑いでよろめく私の体を：アキはまた私の腕を強引に引き寄せた。

——ア、キ…？

「アニキにキスされて熱くなってたのはお前だろ？
…思い出せないなら：思い出させてやろうか？」

あの時とは違う：その眼差しには、何か深いものが宿っていて私の顎を強引に掴んだ手は、溢れる何かで震えている。

少し開いた男の人の口元：だんだんと近づく、少し斜めに傾けたあなたの顔…

ねえ？このまま、また。キス、しちゃうの——？

そんなの、やだ：だってアキ怖い…、何でこんな事：信じられない、ひどいよっ

目には涙がこぼれそうな位溜まっているのが自分でもわかる。パンツ：——！！

…気がつくとは私は、アキの頬を思いっきり叩いていた。

『アキ：最低だよ…』

——ほんとに、最低だよ…！！

瞬きした私の両目からは溜まりに溜まった涙が一気に流れ出す…

涙を見せた途端に弱まったアキの手力

苦味にも似た悲しそうなアキの表情なんて、もう見えていなかった。

私はアキの腕を振りほどいたその勢いで、アキから離れ去ったのだ

から――。

：――それからどれ位走り続けたのかな：走っても、走っても、流れ出した涙が止まらなかった。

ひどい：ひどいよアキ：歓迎会から無理矢理アキに連れ出されてまさかあんな事言われるとは思わなかったよ：。あの日の夜から秘めていた事が何の陰りもなくさらけ出された。

アキは何で今更あんなことを持ち出してきたの：？走りすぎて？泣き過ぎて？息切れが呼吸を阻む：それでも走るのをやめないのは、早く家で思いっきり泣きたいから。

何で：私が大事なら何であんなこと言うの：何であんな意地悪にキスしようとしたの：分からないことだらけのアキの言動をもみ消すようにやっと辿り着いた部屋のベッドへとダイブした。

『私が幼稚すぎるのかな：っ：アキのばかっ――あ：』

帰るまでに沢山涙を流しちゃったせいかな思議ともう溢れ出す程の涙は残っていなかったけれどアキ：さっきほんと怖かったな：そう思い出すだけで、ほんのり涙が滲む。

明日・明後日は土日で会社は定休だけど家族だもん：どっちにしても家では顔を合わせなきゃいけないんだよね：。

守られたはずの兄妹を崩されてしまった今、私はアキとどう接した
らいいの――：

#5 破られたタブー ―?― (後書き)

相変わらずggdggd。笑。

こちら辺はまだ元のStoryと変わらないかも!?!?
そのうちまとめて修正入れます♪

#6 破られたタブー ―?―

side アキ

：――あれは歓迎会が行われた夜

怒りより悲しみを帯びたみゆの泣き顔

目に一杯の涙を溜めて俺を見るみゆの傷ついた目

俺の手から簡単に離れて行ったお前の温もり

それが酷い後悔と共に、傷跡の様に俺の記憶に深く刻まれ
今でも尚、忘れる事が出来ない。

一度心に決めた事を俺からほじくり返してどうすんだよ：。

どうにかしなければいけないと思ってはいたが

その話をどう切り出して良いか正直戸惑っていた。

あの話題を出したらまたみゆを傷つける様な事を言ってしまうのではないか

：：怖かったのも事実だ。

：：そう思い悩みつつも、リビングのソファにて手持ち無沙汰で過ごす休日

昨日・今日は、土・日で会社は定休、みゆも勿論家に居る。

しかし昨日も、飯を食いに部屋から出て来たみゆに軽く声をかけたが
みゆは目を反らしたまま俺を視界に入れようともしせず

返す言葉さえも拒否していた。

ましてや今日はずっと部屋から出てこないんだ。

飯もろくに食わずに：もう夕方だぞ？

そうしてリビングからみゆの部屋のドアを気に掛けつつ
何本目の煙草を吸い終わった頃だろうか：

ラチのあかない冷戦を終わらせる為重い足を動かし、みゆの部屋の
ドアを叩くが

『みゆ：？ いるんだろ？ いつまでそうしてんだよ：』

声を掛けるもみゆの返事無く、叩いたドアの音だけが耳に残る。
意地でも俺を避け続ける気かよ：。

すると苛立ちを向けたドアとの間に洗濯カゴを手にした母さんの声
が一筋横切り

追い打ちを掛けるかの如く、俺を掻き乱していく。

「みゆなら会社の人と会うって朝早く出たわよ？」

『：出たって、何処に？』

「：さあ？ いーっぱいおめかししてたから、さてはデートかしらね
え〜♪」

——デート、だと：？

誰だ？ 誰と：、会社の：？ —— 沢田か——：？

そう閃いた瞬間に俺の芯から沸々とかみ上げて来ていた。
認めたくはない、この。止めどない気持ち——

沢田はみゆに好意を寄せているだろう事は

オフィスでも一昨日の飲み屋でも見ていて明らかだった。

” みゆは今日沢田と会っている ”

確かな事は何も無いが、何故かそう思えて仕方がなく落ち着かない。
俺のものでもないのに：ましてや、みゆは「妹」だ。
妹の男関係に嫉妬する等馬鹿げている。

だが、こんなに嫉妬に狂いそうなのは初めてだったんだ。

—— 早く：帰って来いよ：

そしてこの不安で揺れ動く心を止めて欲しい。

そう部屋でじっとしていると

時計の針の進みの早さが妙に気になり、必要以上に玄関付近の物音に耳を澄ませた。

もう、10時か——。

『……みゆ：遅いな……』

「アキったら心配性なのねえ。

みゆだってもう子供じゃないんだから。そんなに心配しなくても大丈夫よお？」

フフフ、と笑いながら母さんは俺の心配を軽く受け流すが
子供じゃない：だから、余計心配なんだ——。

「：あら？すごい雨！

天気予報では雨なんて言ってなかったのに：みゆ、帰り大丈夫かしらね……」

——雨……？

『…駅まで迎えに行ってくるよ』

「何時に帰ってくるかもわからないわよ？電話してみようかしらね」

俺が迎えに来る事を知ればみゆはまた俺を避けるだろうな：

『いや、いいよ。煙草買い行こうと思ってたんだ。出先で俺が連絡取ってみる』

「アキったら変わらないわね？」

面倒な顔をしてても結局みゆには過保護なんだから」

過保護：ね……。。

そう薄い笑みを吐き捨てつつも

みゆの帰りが遅くて居てもたってもいられなくなった俺は

二本の傘を手に家を出る事にし

会ったらきちんと向き合って話そうと。

俺の気持ちを別にしてもこのままにいる訳にはいかないと。

雨の音しか聞こえない夜道を

揺るがす不安を抱えながらみゆへとひたすら足を進めた。

全てをかき消す様な強く、激しくなる一方の雨。

駅まで来たはいいが、母さんの言った通り

みゆがいつ帰ってくるか検討もつかないままつい気持ち任せで来て

しまった。

全く：終電が出るまで待つ気かよ俺は：

こんな風に当ても無い女を待った事等今まで一度だって無かった
例え仕事でも計画性の無い行動は無駄だとさえ考えていたんだ
その頑なに守って来た思考が

たった一人の女に、まさかこんなにも容易く覆されるとは：呆れる
にも程がある。

この状況で俺からの電話に出るはずもなく

もしかしたらこの雨ではタクシーで家まで帰るとも考えられると
為す術も無く改札へ向かい、取りあえず駅の屋根がある所で待つて
みようかと

濡れた傘を閉じようとした：——その時だった。

この目に飛び込んで来たのは、改札の奥にぼんやりと視界に映るみ
ゆの姿

内心、本当に会えると思ってなかったのか、自分の目を一瞬疑って
しまう程だ。

改札から出たみゆは、雨が降り出していた事に気づいたらしく
雨を降らせている夜空をぼんやり見上げて立っていた。

——綺麗だな：

まるで、一人置いてきぼりにされた様な顔をして
雨粒を手のひらで確かめているその姿は
寂しげで、儚くて：それでいてとても麗しい。

アイツの為にあんなにめかし込んで：こんな時間まで何やってたん

だよ…

そんな気持ちをぐっと押さえみゆのいる方へと足を進めた

『——…みゆ?』

「…ア、キ? 何で…!?!」

驚いた顔をしたかと思えば、すぐに俺から目を反らし

『みゆを迎えに来たんだ』

「——…いい! 頼んでないっ!!」

反抗的な台詞を投げ捨てては

みゆは逃げるように雨が降る中を足早に歩き出して行く…。

『…待てよ、濡れて帰るつもりか?…つ、——みゆ!…!』

——気づけば、我構わず、形振り構わず。

傘を差すのも忘れ、雨の中を濡れながら去りゆくみゆを夢中で追いかけていた。

——逃がしてなんかやるもんかよ。

バケツをひっくり返した様に降り続けている雨はまだまだ止む気配を見せない…

『無茶すんな、風邪ひくぞ』

「放っというてよ! アキとは話したくないのっ!!」

振り返りもせずに言葉だけ放り投げるみゆは

男に適う筈の無い速度で、俺から離れようと必死になっている。

故に短気な俺は、一向に止まる様子の無いみゆの手首を

後ろから思い切り掴んだんだ。

声を張り上げながら女を追いかける等、俺にしたら——前代未聞だ。

『……待って!!』

「——っ放し、はーなーしーて!」

『ムキになって何やってんだよお前は。ずぶ濡れじゃないか…』

雨水が滴る程に濡れているみゆの長い髪

可哀想な程に冷え切っている握りしめたみゆの手

「いいから放つといてっばっ! 一人で帰れるから手えっ…放してよ…っ」

寒さで微かに掠れたみゆの抵抗の声

言葉を途切れさせる悲しみの涙声

みゆ——…

『一昨日は：俺が悪かった。みゆを傷つけるつもりは無かったんだ…』

あの時は俺も色々と苛立っててな、ついあんな事を…』

俺に手首を捕まれてても

無理矢理歩きだそうとしていたその時、みゆの動きがピタッと止まる。

「……”つい”って：私は：アキを信じてたのに
私を大事に思ってた言わないでいてくれてるんだって、そう信じて
たのに：！」

やがて、ようやく振り返り涙目で兄を見つめる妹。

みゆの頬を伝う涙が雨粒に紛れていて
どれ位の涙を流しているのか分からなかったが

こんなに傷つけ、泣かせても。こんなにも愛しく思えてしまうんだ。

『大事に決まってるんだろ：』

「じゃあ、何で？何であんなこと：っ」

だからか、だからなのか。その泣き顔でみゆが目元を歪めた瞬間
押さえ切れなくなった気持ちが一気に吹き出してしまっていた。

：——ポフ：……

気づいたら、この腕の中に：みゆを力一杯に押し込めていた。

——ああ無意識だった。

でも、抱き締めずにはいられなかった……。

この、止めどなく溢れて出てくる衝動を抑える事が出来ずに
みゆの体に向かい、注ぎ込んでいた。

こんな言い訳出来ない事を、誤魔化しようのない事をして
俺はこの後、みゆに何と言いい訳する気なのだろうか。

「な、にしてるのアキ…」

『何って、分からないのか？お前の体温めてやってるんだけど？』

この雨で冷え切った俺の腕にすっぽり入るみゆの体の温もり濡れに濡れていても変わらない、抱き心地柔らかな感触それらをまだまだ欲しいと、この腕が泣き叫ぶ。

強く、強く。潰れてしまう位まで抱き締めてやりたいと――

「いっ、いいよ：私は大丈夫だから：っ」

『――暴れんな。大人しく抱き締められてろ』

またみゆを困らせる事は十分、分かっていたつもりだ。

「ごめんね、私意地張ってた：あの日のことも、一昨日のことも全部忘れるから。」

私、大丈夫だから：そんなに寒く、ないし……」

『：忘れられてたまるかよ……。あの日の夜からみゆしか見えなくなってたんだ。』

妹と知った今でも。愛おしくて仕方がない……。』

「え、ちよつと：待って……？」

けれどももう引き返せない、戻らない。兄？妹？それがどうした――
――ウンザリだ。

そう諦め半分で、腕を振り解こうとするみゆをより力を入れて抱き締め直した。

「……っ待ってやめて？アキの言ってる意味がよく、わからないんだけど……」

みゆは困惑しながらもただ俺をじっと見つめ

俺は腕の力を緩め、俯いたみゆの顎をグイッと持ち上げ、男を零す。

『……すぐに解らせてやる』

お前が俺から離れようとなんかするから、こうなるんだ——！：

#6 破られたタブー ―?― (後書き)

♪＊お知らせ＊♪

#4 運命のイタズラ ―?― side アキ

12. 24 ちょっとだけえっちに? 変更しました!

Storyには全く影響ナシですが

もし、気になるー! な方がいらっしやいましたらどうぞ♪

#7 イトしい温もり ― ? ―

Side
みゆ

アキに背を向け続けて、まだ1日とちよつと

——沢田君とのデートまで残り数時間

何着て行こうかな？どんな髪型にして行こう？

そんな事を考えていると自然とアキの事を忘れていられる気がしていかにもデートです！とゆうキメキメの装いになってしまったけれど朝早くに家を出て沢田君と約束したお昼過ぎまで奈緒とブランチをする事になった。

「……可愛いマブイ！そのワンピ！随分気合い入ってるじゃない？」

「そう言えば、歓迎会ん時主任と途中で帰ったけど大丈夫だったの？」

日本に歸つて来て初めての休日なのに
アキつたらずつと家に居るものだから
顔を合わせる気まずさで息苦しくて、早く早く家を出たくて。

「んー？　大丈夫、って？」

「主任あん時難しそうな顔してみゆ連れて帰っちゃうから。何かあったのかなって。」

そう言えば、連れ出された時奈緒も一緒にいたんだっけ……

『ん？まあちよつとした兄妹喧嘩：かな…？』

「……そっか、そっか」

…にしても。お兄さん二人、顔は微妙に似てるけどタイプ全然違うのね？

専務はあんなに人当たり良いのに主任は…最悪。」

『あーうん：だ、だよね……』

でも、奈緒が軽く流してくれてほんとよかった：

いくら奈緒でも兄と妹があんなことをしたなんて、理解を示してくれないだろうし。

奈緒は、同じ年なのに大学時代までの友達とは違ってとても色気があって

見かけも中身も私より全然大人、言うならお姉さんみたいな…。

いつも人の事ばかり心配してて自分の事は誰に話してるんだろう？

やっぱり、彼氏かな：そう内心で頬を緩ませながらも

カフェにいた私たちはご飯を食べて、そして他愛ない話をしばらくしていて。

「みゆそろそろ時間じゃない？」

『あ、もうそんな時間？』

「…ま、程々に頑張っておいで。沢田によろしくね？」

けれど、歓迎会の時には沢田君を猛プッシュしていたのに

最後に私を送り出してくれた言葉ったら、案外素っ気ないもので。

相変わらず私の話を聞いてもらうばかりで

今日も奈緒の恋バナについては語られなかったけれど

カフェを出て奈緒と別れた私は、未知なるデートへと緊張の矛先を向けていた。

——鋭い奈緒のことだから、もうこの時には気づいていたのかな？

既に私の心の中に住んでいた、禁断の匂いに……。

『……わあ！すごい、海だー！』

「私服ののみゆさんスゲーかわいい。あ、いつもかわいいっすけど！」

あー：出たあつ沢田君の必殺！乙女心くすぐるフレーズ！何度聞いてもテレる……

沢田君との待ち合わせ場所は、横浜中華街に程近い「石川町駅」おっきな肉まん頬張りながら中華街を歩いて抜け港から客船に乗って移動しようとしていた。

て、ゆうか：沢田君てこんなにカッコよかったっけ。

私服姿初めて見たけど、若いからスーツ姿よりカジュアルの方が似合うなあ

なんてポケットと見つめている場合ではなく
楽しそうってゆう軽い気持ちで来ちゃって申し訳なくなってきた……
そう控えめにチラッと沢田君を見ると、あっさりニコッと返されてしまう。

「喜んでくれて嬉しいです。やっぱり、好きっす……」

『海好きなの？なかなか見れないもんねえ』

「そーゆうちょっと抜けたところ、……好きっす……」

船上を絶え間なく優しく包みこむ風

それに紛れることなく真っ直ぐ心に届いてしまった、沢田君の純情

えっ…私の、こと…？何で、この人って：

フイにそーゆう事言っちゃうのっ

てゆうかサラリと言えちゃうのっ

楽しそうだからとか、アキの事考えたくないからとか

不純な動機でここに居る自分が恥ずかしくなってくる…：

私は、今日本当に来ちゃってよかったのかな？

沢田君をちゃんと男の人として見なきゃいけないんだよね？

船上を取り巻く大海原に、逸らしたくても目を逸らせない眩しい太陽

『沢田君は、どうして私なの？まだ会ってからそんな経ってないなあって…』

こんな大自然に触れていると、いつもより心が大きくなった気がして
どんな聞きづらい事でも聞ける気がして、口からフイに出ていた。

「入社日が初めてじゃないんすよ、みゆさんに会ったの」

『うそっ！そうだったのー？』

…忘れてるとか、最低だ私…

「みゆさんが覚えてないのも無理ないっすよ

去年の会社説明会の時に一言二言、話ただけなんです」

会社説明会：もしかしてタカにいに頼まれた時のかな？

「俺の、一目惚れでした。」

見かけもタイプだったんですけど

新入社員でも無い俺らにも優しく微笑みかけてくれたみゆさんの
笑った顔が

ずっと忘れられなくて、初めて会った人なのにスゲー好きだ
なっ
て。

もっとこの人を知りたいと思ってこの会社に就職決めたんです」

一目惚れ：かあ：面と向かって言われたの初めてだ嬉しいよね、や
っぱり：

……って、え：入社動機が不純すぎるよ沢田君！！

「でも部署まで一緒になれるとは思っていませんでした。
入社したら、会社中探すつもりでいたんで」

そっか：そんな前から気にかけてくれてたんだ：

『嬉しいな：ありがとうね』

「いやそんな風に言われると…」

沢田君は照れた顔をして自分の髪をくしゃっとしては

「少し早いけど、飯食い行きましようかつ！」

照れ隠しをするように

沢田君は体の向きをかえて歩き出していく：。

ひしひしと肌にまで伝う、本気
眩しくて眩しすぎるストレートな愛情

応えてあげたいと、素直にそう思えるのに…

私、沢田君を：好きに、なれるのかな——？

やがて：ご飯とお酒を堪能した私達が最後に向かったのは、夜の遊
園地。

『わぁ！観覧車のイルミネーションキレーだねえ！』

よくドラマとかに出てくる

おっきな観覧車が遊園地全体を鮮やかに彩っていた。

「乗りましょうか！」

『うんうん！』

あの頂上から見たら夜景もって綺麗だろうなあなんてうっかりして
いたけれど

観覧車ってアレだね、カップル御用達の…。

こんな真っ暗で狭いところに2人きりって：ちょっと、緊張…

今の私にはまだ、彼への気持ちが好きとかゆう感情には届かなくて
そう、言うなら今は気の合う友達って感じなのかもと…きっと思い
始めていた。

だからね：キミのその真剣な気持ちから
なるべく目を背けていたかったのかもしれない。

観覧車内、目の前で夜景を見て無邪気に笑っている沢田君の傍らでこの軽い雰囲気のまま一周してくれたらいいって、私はのんきに思っていたんだ。

『今日ほんと楽しかったあ！ありがとうね、沢田君』

でも…沢田君はそうはさせてくれなくて
向かい側に座った沢田君から伸びて来た手は、私の手を取ってそつと、握る。

——沢田、君…??

景色から目を移すと、そこには少し怖いくらいに切ない表情

すると途端に握られた手を引っ張られて：ハッと気づけば

前に前に身を乗り出していた沢田君の唇が、すぐそこまで迫って来ていて

不意に唇が…：重なりそう、に…：…：！

『…：——やあっ！待って！沢田君っ！』

だから私は、無意識に顔を背けていた。

「すみません、強引に…

でもこうでもしないとみゆさん俺の事男と意識してくれないでしよ？」

けれど、その真剣な眼差しが見透かしているのは確かに私の心で
それでも、ドキドキかバクバクでこの胸は鳴り続けていて

でも、確かに今。沢田君を男なんだと、――感じてしまった。

『…ごめん、ね？沢田君……』

そだよね、沢田君の気持ち知っておきながら、私ってば：こくなる事は分かっていたはず：

「いえ俺、焦り過ぎましたよね」

そう言って笑いながらも握り合わせていた手の力は、この上なく強く痛く

「俺は、みゆさんが好きです。会って話して、前よりもっと好きになりました」

言葉を紡ぐよりも目を会わせ、視線よりも一気に貫く”好き”に改めて愛の重みを感じさせられてしまうの。

どうしよう、何て答えればいいの：

『私…』

「本当は、今日デートしてくれただけでスゲー嬉しいんですだから今は：何も言わなくていいっス

でも俺、いつか絶対みゆさんを振り向かせてみせますから！」

：なのに最後に私の手を包んでいたのは、全てを見据えた男の人の優しさで。

そうゆう人だからこそ、ちゃんと答えを出さなきゃいけないんだって
そう、自然と思えた…。

——ある意味のホツとを抱えた帰路
私は電車に揺られながらも、今日の事を思い巡らせてみる。

それにしても…意外と強引なんだな、沢田君で。
会ってそんな間もないのにいきなりキスって
思わず拒んじやったじゃない…キスなんてできないよ…

…——会って、間もないキス…かあ…

そう言えば…アキのキスは、拒まなかったな…。
あの時はお兄ちゃんだって知らなかったから初めて会った人同然の
人だったのに
キスをどうして拒まなかったんだろう…。

奈緒の言う通り、恋には時間も理由も、要らないんだろうな…。

…って！何かこれじゃまるでアキに恋してるみたいじゃない！
ナイナイ！兄妹だし、しかも私とっても怒ってるんだからっ！

…そうブルブル首を振りながら降り立った駅
そこで待ち受けていたのは、急に降り出したものすごい雨と

——アキだった…。

そこは：——激しい雨が帰り道を阻んでいた、家の最寄り駅。

ザアザアと降り注ぐ雨は止む気配もなく
家まで大した距離はないけど傘なしではとても無理そう：。

だからたまには贅沢しちゃおうかな、と

タクシー乗り場の魅力に引き寄せられて足が動いた時
斜め後ろからの声に耳を奪われる

振り返ると、：そこには2本の傘を片手に持つアキの姿で。

”迎えに来てくれたんだ！”

そう和みそうになった時に、一昨日の出来事が頭を駆け巡り
後には引けないと、雨の中をアキから体を背けて足早に歩き出して
いた。

「——みゆ！！」

このままじゃいけないって、いくら逃げた所で帰る場所は一緒なの
について

心ではそう解っていても、何でだろうね：

一回意地になるとどこでやめていいか分からなくなっちゃう。

途切れ途切れに背中を刺す、雨にもかき消されないアキの声

普段、沈着冷静なお兄ちゃんが声を上げて雨の中人を追いかけてい
るなんて

その性格から言って想像もできない姿。

どんなに一生懸命走っても走っても

足のコンパスの差は、私を追い詰めていく——：。

後ろからグッと強く手首を掴まれ、あっさり捕まってしまう自分が情けない

こんなどしゃ降りの雨の中、意地張ってる自分が幼稚に思える
背中から聞こえるアキの声に不思議と、泣けてくる：

アキはこんなに必死になって兄妹の仲を繋げようとしてくれてるのに
私は後ろを向いてばかりだね：

だからちゃんと話さないのと、2日振りに合わせた視線

アキも持った傘もささず雨に濡れていて、びしょ濡れになった兄妹

けれど振り返って後悔したんだよ——：

アキのいつにない真剣な眼差しに、私はあの日のようにまた

心を奪われそうになるから——。

切なさにも似た苦しそうな表情を浮かべるアキ。

泣きじゃくりながらも

やがてその逞しい両手に一気に：——抱き寄せられる。

フワっと体が宙に浮く感覚もなくて

戸惑っている暇もない位の一瞬の出来事だった。

ガッチリとしたアキの腕はとても力強くて、拒む隙さえ与えてはく
れなくて

これだけ冷たい雨でずぶ濡れになっているのに

アキの腕の中は無性に温かく感じるの。

何で私は今、アキに抱きしめられてるんだろう…
相変わらずアキの考えてる事は私には理解出来ない…。

でももっと、理解出来ない衝撃が降り注いだんだ――

「――好きなんだ…みゆ…」

――好き…って…？

思わず聞き返しそうになってしまう位に、疑問が浮かび上がるこのセリフ。

『んつと…それは妹に溺愛してるってゆう…』

「お前な…妹に”好き”とかわざわざ言う兄貴がいるかよ」

半分呆れた声にいつもより数段と鋭い切れ長の目

『そ、そっかー妹に溺愛とか兄としては恥ずかしいよねー』

「みゆ？ いい加減にしろよ？」

どうしよう…何かアキ怖い…

『だって、それは…』

それはきつと。私たち兄妹には似つかわしくないセリフ…

「もう一度言ってやるから…――よく聞いてろ」

…なのにあなたは。その強気な大きな片手でガシッと私の首を掴み

そして吐息のかかる距離まで引き寄せられると
やがて放つの：禁じられたラブーを。それでいて甘い響きを……。

「——お前が。好きなんだ」

アキの瞳にガツチリと視線を固められて
疑う言葉も出てこない程の吐息に、……もう釘付け。

私は：今、お兄ちゃんに愛の告白を。されている——

アキの顔がだんだん迫ってきて唇が、ゆつくりと。重なった……

雨水に濡れたアキの唇は重なり合うとなぜかとても温かくて
唇から熱さが体中をあつためていく感覚さえする。

だからかな？ 普段ぶつきらばうなアキからは考えられない位の
唇から伝わる優しい温もりに何故か余計に涙が出そうになったけれど
アキの唇がゆつくりと離れた時我に返ったようにハツとする。

好き：アキが、誰を……？ 私、を……？

アキの言葉の重大さに改めて気づかされて

『えっとーそれは……』

けれど無意識に胸のドキドキが高鳴って……

『好きって：ちょ、アキ？ 私たち、兄妹なんだよ？』

「……あのな、当たり前な事言ってるな……」

本気なの：アキ…？

そうゆう視線を向けてみても私が恥ずかしくなる位

アキは目を反らそうとしてくれないものだから

私も見入るようにじっと、ただアキを見つめる事しかできない。

「…それでも、もう俺にはみゆしか：見えないんだ…」

そんな目で、見ないでよ…急にそんなこと言わないで：

雨に降られている感覚なんてどうでもよくなってしまう。

涙をぬぐい取る様に濡れた私の頬を指で撫で始めたお兄ちゃんの指それは、いつの間にか私の唇を撫でていて…気がつくとき…

『…っは…うん——！！』

アキの熱い気持ちがるごと流れ込んでくるようなとても深く、情熱的なキスが、舞っていた…

「みーゆ：絡めて？舌……奥まで奪わせろ」

私が受け止めるのがやっとな位の熱い、熱い。キスが…。

アキが顔を傾かせる度に雨粒が2人の唇を潤していくそれをお互い味わうように、深く。深く……。

———まただ：私は、アキのキスを：拒めない……………。

「……—こんなとこいたら風邪引くな：帰ろう、みゆ……」
『うん……』

それから家に着くまでアキは何も口にしないで
だから私も、そんなアキの後ろを
黙ってついて歩いていくことしかできなかった…。

#7 イトしい温もり ―?― (後書き)

ごめんなさいっ
ssssdひゃっはー!
↑汗
数日中に修正かけます。

#8 イトしい温もり ―?―

side アキ

大雨に降られたカラダ、禁じられた欲望が濡れた今夜

みゆと共に家に帰った後、先にみゆを風呂に入らせ先に着替えを済ませた俺は、居間で煙草を吹かしながら考えていた。後先考えない衝動的な行動だったとは言え、もう：限界だ…。

一度はアニキを演じようと試みたがみゆを近く感じるだけで普段冷静な俺が簡単に崩れてしまう程の溢れんばかりの想いを抱えたまま兄妹をやっている自信は、さらさら無い。

——ごめんな、みゆ…

「…………アキ：お風呂いいよ…」

『あ、ああ：』

でもな、お前も悪い。

風呂上りは決まって薄手のキャミソールに短パン姿兄への表情を向けつつも、その瞳はどこか揺れている。

そんなに意識してんなら

何でこんな無防備な格好して出てくんだよ…

本当に：男ってもんをわかってない奴だな……。

「あの…さっきのって…」

その上、緊張で押し潰されそうな震えた声を聞いていると戸惑うばかりに泣き出しそうな表情を見ているとその可愛さを、この小さな体を、壊してしまいたくなる。

触れて：乱して：——滅茶苦茶に。

『…本気だ…。もう、後には引けないんだ：』

「でもっ、でも私たち…」

「家で話すのはよそう。明日は会社だ、早く寝ろ。」

ああ、みゆ？ 沢田には…：…いやいい、お休み。」

だが、頬に手を掛けただけで罪悪感が胸を締め付けた為に震わせた拳をそっと収め、自分を抑えながら風呂へ向かった。

——どっち道、この家にはもう居れない。

このまま一緒にいれば

俺はいつかみゆをこの手にかけてしまうだろう。

早く部屋を借りよう：みゆに手が届かない所に、妹に手を出してしまう前に。

しかし：あんなに簡単にキスされやがって…。

俺と同じ様に沢田にもされてたのかもしれないと思うと

いてもたってもいられない気持ちに押し寄せ

渦巻く嫉妬と焦りをかき消すかの様に、熱いシャワーを頭から思いっきり浴びた。

「：——おはよう：」

——その翌朝の事。

食卓に現れたみゆは寝不足な目をぶる下げ

虚ろな瞳で俺をチラチラと盗み見をしている。

どんな事であれ、俺の事を考えて寝れなかったんだと思うと
みゆを独り占めした気分になり、：嬉しかった。

『一緒に出るか、みゆ』

「：う、ん……」

だからなのだろうか。そのトキを少しでも感じたい心持ちになり出
社を共にしたが

家の門を出た途端意外にもみゆが必死に口を開き

「あのね、私考えてみたんだけど

アキきつと錯覚してるんじゃないかなって思ってた」

『——錯覚：？』

「私たち、あんな：再会しちゃったでしょ？

だから、その：好きだって思いこんじやったってゆうか：

きつと：アキが好きって言ってるのは恋愛感情とかそんなんじや
なくて

えっと：だからね：」

そこまで言い終わると、臃げに俯いた。

俺の気持ちを認めたくない、そう言っている様に聞こえる。

『みゆは、そうゆう事にしたいのか？』

「だって！兄妹なんだよ？？そんなの、変だよっ！」

アキは、どうかしちゃってるだけなんだよっ…」

『そうだったら：わかっててあんな事、しないだろ…』

そうだな：どうかしてるよ俺は：己の気持ちながらも変だと思うしみゆの言ってる事は、常識的に言えば何一つ間違ってる。ない。だが、急に大人しくなったみゆのその物憂げな瞳を見る度こう思うわずにはいられない。

——そうやって、俺の事で頭が一杯になればいいと。

この想いの行き止まりが来るまで

俺はこうして走り続ける事になるのだろうか…。

——そんな俺の歪みゆく心に追い風を吹かせたのは何も知らずして俺に踏み込む、兄貴だったんだ。

仕事に身が入らず、行く宛のない想いを携えていた時一息つきにやって来た社内の唯一の喫煙所に、聞き慣れた声が降り注ぐ。

「よう、アキ！喫煙者も追いやられるばかりだよなあ。」

次期後継者とだけあり、色々と悩みは尽きないのだろうかどんな時も陽気でいられるその性格が羨ましい位だ。

「——…おい、アキ？」

『ああ、悪い、何だっけ？』

「おいおいおい：珍しいな、ボーっとして何か考え事か？」

禁煙所内の自販機引き出しから珈琲を2本取り出しては
1本をこちらえ向けて放り投げる専務は

こんな俺を珍しがり、茶化していた…のも束の間で

「こっちの仕事にはまだ慣れないか？」

『いや、ロスよかやりやすいよ』

「なら何なんだ？　そうかそうか！　女だらうっ！」

『……ああ……』

そう答えた俺の言葉に、珍より極上の驚を向ける。

「：ドンピシャか！　日本で女できたのか？　見かけによらず手が早え
なおい！」

『一方通行だけどな……』

「そうかそうか！　アキが女の事で悩むとはなあ……」

本当だよな：俺が女の事でこんな真剣になるとはな……。
兄貴には出張でロスに赴いた時、何度か当時の女に会わせた事があり
ある程度の俺の女関係と女癖を兄貴は知っていたんだ。

「アキが落とせない女なんていんのかー？」

『なんだよそれ……』

しかしまるで俺が百戦錬磨の男の様に言う兄貴の言葉には、少し吹
いた。

『あいつの前だと冷静じゃいれなくなるんだ……』

「女に固執しないお前がなあ……今回は、本気って訳か……」

しかし、お前をそんな本気にさせる女ってどんな女だよ？」

『そうだな：男慣れしてなくて、それで……』

兄貴の言う通り、こんな想いは初めてだった
みゆを思い浮かべると心が満たされる様な気さえする。
いつ何時もこの手に納めておきたくて、俺を見つめていて欲しくて
なれるものならば、俺が。お前に全てになりたくて――。

「アキお前、そんな優しい顔もできんのな。」

『何だよ：俺が冷血人間だとしても言いたいのか？』
「違うって言えるかー？」

確かに人には無愛想とよく言われるが
それはただ単に万事に興味を持てないだけで。
そう：“俺”とは、そう言う生き物だった筈なんだ。

「その子とは：うまくいきそうにないのか？」

『ああ：俺達に未来は、無い……』
「おいおい、随分大げさだなあ！生きてさえすりゃどうにかなんだ
ろー」

兄貴は何も知らず笑っているが
常識的に考えればこの俺の気持ちは禁じられているもので
俺がそれにどんなに興味を示そうが、果て無き平行線を辿る運命に
ある。

「何かわからんけど色々抱え込んでそうだな？」
でもな、アキ。愛した女はいつまでも自分の近くに居ちゃくれね
えんだ。

手遅れにならないうちに、好きなら何とかしろよ？」

そんな俺の心中を察したのか
渋い顔をしたと思えば、頼もしくも兄貴らしい事を言ってくれた訳
だが

その女が誰かを知れば、こうもいくまい。

『…ああ、サンキュ、兄貴。』

そうして：兄貴が喫煙所から去った後

もう一本煙草を吸おうとすると：何だ：無性に頭が重く感じ
想う事さえ罪だと言わんばかりに、頭痛が俺を覆い尽くす。

故に柄にもなく考え過ぎたかと、取り出した煙草をしまい
気持ちを切り替え職場に戻る足を急がせていた……時

「——しゅっに……いん!!」

良くも悪くも、この禁断に荒波を立てる一人の女に呼び止められた。

そこにいたのはこのブリッコの通り、みゆの同僚の木村さんで。

”仕事の相談があるから今夜飲みに行かないか”と言う

何とも無礼極まりない、面倒な誘いだった訳だが

断じて誘いに乗らなかった俺を、木村さんはある一言で俺の顎を頷
かせた。

「んっとお、そうっ！みゆの事もあつてえ…」

『みゆが……どうかしたのか?』

みゆに何かが、あったのだろうか——?

「それも含めてえ仕事終わった後少しお話できませんかあ？」

そんな訳で、仕事後会う約束をしてしまったが、勿論気が乗らない。別に嫌いなタイプではないが：

みゆと出会ってしまった以上、どの女もどうでもいい…。

：——夕は暮れ、時は訪れ：待ち合わせのバーラウンジ

木村さんの相手が面倒な上に、頭痛は治まらず体も妙にダルい。それ故にみゆの話だけを聞き出し早めに切り上げて帰ろうと取り敢えず

昼間より一段と化粧の濃くなった木村さんの横に腰掛ける。

『——で？飯は？』

「今までみゆ達といええ食べてきましたあ」

『そうか…』

しかしこの木村さんの話し方は何とかならないのかと、心中を悩ませまた、すると今頃みゆも出てるのかと、妹の行動を追い求めながら。

『…で？話って？』

「せっかちなんですねえ主任ってその為に来たって感じじゃないですかあ」

『そうだけど？』

ところが何を期待してたんだこの女は：

「みゆの言ったとおりだなあ…」

『へえ…みゆが何て？』

「”アキは素っ気ない” ってえ！彼女にもそうなのかなあ？
あたしい、もっとお、主任の事色々知りたいんですう」

『——は？何でだよ…』

俺はこんなくだらない話をしに来た訳では…

「それをあたしに言わせるんですかあ？

主任ってえ女心わかってないなあ…」

ところがしまった、俺とした事が…

そっちの方向には持って行きたくなかったのだが

気づけば、木村さんが横から上目遣いで俺を覗き込む様に見ている。

「今日はあ飲んじゃおっかなあ」

更にはさり気なく木村さんは俺の肩にもたれ掛かって来る始末。

参ったな…。こんな雰囲気のある場所で会うべきじゃなかったか…

『そうすればどんな男でも落とせると思ってるのか？』

…しかも、だ。一向にみゆの話になる気配もない為

後悔に後悔を募らせつつも、この際徹底的に面倒臭さを態度に出してやろうと思い

肩に乗った木村さんの頭を俺はそっと手で戻し

「主任てえ、会社の外でも驚く程冷たい男なんですねぇ…」

『よく言われるよ：』

「あたしい、はっきり言っちゃうとお
今まで狙った男を落とせなかったことってないんですよ」

俺はウイスキーの入ったグラスをつまらなそうに回しながら
木村さんの武勇伝に適当に相槌を打っていた。

「誘ったら乗ってくる男ばーっか。
でももうそうゆうの飽きちゃったんですよえ」

だがそんな中、少し酒を食らっただけで頭が朦朧として来る訳で。

「私い、主任の事が好きになっちゃったみたいです」

『…………。俺が釣れないから

単に自分のプライドが許せないだけなんじゃないのか』

「ううーんそれも、あるかなあ。

でも、純粹に主任が好きだって気づいちゃったんです！」

木村さんお得意のブリッコ言葉が削ぎ落とされていた事に気づいた
時には

話半分も耳に入っていなかっただろう。

『なら：俺のどこが好きんだ？俺は冷たいんだろ？』

「冷たいけど：それも含めて全部ですっ！」

呆れた女だな：その文句はこれといって特に好きな所が
浮かばない時にとりあえず使う言葉だろうが。

だが、俺自身の事を思うとそれでも無い気がしてきた。

みゆの何に惹かれたかと聞かれれば、これと言った文句が出て来な

い。

みゆなら何でもいい、それがみゆでなければ好きにはならなかった
…それだけの事。

それはみゆだから…全部…か…これ以上の言葉はないって事か？

『——君は俺に何を望んでいる？』

俺は…みゆに何を望んで…

木村さんと話していても、いくら意識が薄れていても
みゆが、みゆに、俺の頭の中はそんな事で占められ

「そりゃあ、好きになった人には
好きになって欲しいってゆうのが普通じゃないですかあ？」

色目を使って誘惑してきたと思えば
こうしてあっけらかんと素直に気持ちをぶつけてくる女を前に
俺はこんな事しか考えていなかった。

”みゆが俺を好きになる”……？

そんな事はある得ない…いや、あつてはイケナイんだ。
けれどもし、みゆがの心が手に入ったならば、俺は——…

「…主任っ？大丈夫ですかあ？顔色悪いですよ？」

熱あるんじゃないですかあ？ならならどっかで休みましょうよお」

それにしても、”どっか”……この女は全く…。

そう悩ましげに額を落とした矢先、重い頭がガクンとしなだれる。

ああ今思えば、あの雨にやられた、か…？

『そんなつもりは無い。悪い、今日は帰るよ』

「そう言われると思ってましたあ。タクシー拾うの手伝いますう」

そうして結局、みゆの話とやらが聞けず終いになった訳だが
面倒に追い打ちを掛けた体調の悪さを言い訳にし

店を出た俺は、建物の下で車を拾う——がしかし。

『家は近いのか？気をつけて帰…』

「大丈夫です！一緒に行きますからあ」

——は…？

俺が弱っているのを良い事に、気がつくとも木村さんは俺と一緒に車
に乗り込んで

徐ろにキラキラのコテコテの携帯を出し

いそいそと電話をかけ始めていた。

「…みゆう？実はねえ主任が

体調が悪くなっちゃったみたいでねえ、今からご自宅に…」

その相手は：——みゆ…？

木村さんの携帯電話からかすかにみゆの声が漏れて聞こえてくる

——みゆ、みゆに：会いたい…

その想いだけが強く残る中、淡い兄妹の記憶と共に意識が遠のいて
いった…。

#8 イトしい温もり ―?― (後書き)

時間がなくて全然修正できていませんが。笑
とりま。進めてゆきたいと思います♪

読んで下さっている方々、心からありがとうございます☆
ゆるり〜禁断へと堕としますね♪

次回 s i d e みゆはそんな重くないので、近々ゆきます*

#9 イトしい温もり ―?―

side みゆ

――遡ること：半日

雨水に洗い流された、晴天の翌日

どしゃぶりの雨にかき消されてしまったような、アキの告白

昨夜からアキとちゃんとした話が出来ていないまま出社した私は朝のお茶を煎れに給湯室に来ていた。

アキ：昨日言ってたこと、ほんとに本気なのかな…

分かっていた――アキはきつとあんな嘘をつかない。

私は何をこんなに戸惑ってるの？またキス、しちゃったから？

アキに触れられた唇を指でなぞると、ぽうっと顔が熱くなっていく…

そんな心此処にあらずな状態だったものだから

ツルツと滑ったお茶碗は私の手から抜け、地面を目掛けてダイブしてしまった。

――ガ、シャッン！

見るにも無残に散った、カタチ様々なカケラたち。

収まっていたはずのものがバラバラに散らんとしている、…兄と妹のカンケイ。

アキの気持ちを無視したなら、拒んだなら…

兄妹のカンケイさえ粉々になってしまふのかもしれない……。

この時なぜか、それだけは確かに思えた。

「…ほんっと危なっかしいっスね、みゆさんは…」

そうしているうちにも、ぼやけた視界を遮ったのはスウツと伸びて来た男の人の手。

散らばった破片を一つ一つ丁寧に拾ってくれている姿には和まされなければ

『沢田君…ありがとう…』

そうだ、アキだけじゃない、昨日沢田君にも告白されたんだった。なんとも思い出すと急に恥ずかしくなってきた

条件反射で沢田君と触れそうになった手をスツと引っ込めていた。

「そんなに意識されると…」

『あ、違うのっごめん…』

…だめ、普通でなんていれるワケないよ：

「いえ、男として意識して欲しいつつたのは俺ですから：

ただ…その…その仕草が可愛すぎてソソられるつつうか」

っ…！！！！そんなことゆうから、もっと恥ずかしくなってきたちゃったよ…っ！

沢田君も、アキも。方法は違うけど2人の想いは直接私の心に訴えてくる。

そして私はどちらにも、曖昧な態度しか取れていない。

「みゆさん、顔真っ赤！」

『さつわだ君のせいでしょう！』

なのに、アハハハと無邪気に笑う沢田君を見ると
恥ずかしさも、後ろめたささえ何処かへ飛んで行ってしまつて。

「おいしいの、頼みますよ！」

『え？ 食いしん坊だなあ沢田君は。お昼まだだよー？』

「お茶ですよ、みゆさん」

ところがお茶とゆう仕事をすっかり忘れていた私。

そんな私を見てククツと笑いをこらえながらもオフィスへと戻って
いく沢田君。

人をドキドキさせたり、かと思えば雰囲気壊して和やかな空気を
作り出したり

不思議な人だな、沢田君って…。

：やがて迎えたのは、就業時間を示す定時・5時

まだ赴任したばかりだからなのか

外回りや会議が多いみたいでアキはあまりオフィスにいない。

そんな中、帰り支度をしていた頃

いつもの如く、デスクの向こう側から奈緒の誘いの声が掛かる。

「今日久しぶりに3人で飲み行かない？」

『あっ！ ねー！ いくいくー！ 絵里花もモチロン行くでしょ？』

「行くけどお：私は途中でバイナラするからあ」

「何、男とでも約束してんの？」

と言っても、こうして3人で飲みに来るのは何週間か振りで。前の時を繋げるように、前からよく来ていた隠れ家的な居酒屋さんに入った。

すると間髪なく本日の本題に入る奈緒、そして興味をツツく絵里花

「みゆ、昨日はどうだったの？」

「なにないにい？昨日って！」

あ、そっか、絵里花には言ってなかったんだっけ：と

昨日沢田君とデートした事を絵里花に話したは良いけれど

「絵里花、あんた口軽いんだから振れ回るのはやめなさいよね」

「わかってるってえ。沢田っちやるう♪：で？で？進展はあ？」

何だか奈緒はお母さんバりに絵里花のお世話を焼いていて。

『告白：されたけど：まだ返事できなくて：』

「ふうくん、そんな事になってたとはねえ〜」

「ま、後は沢田の頑張り次第って事よね」

あんまり頑張られても困るような：

「そんなことよりいみゆ〜主任てえ、どんな人なのお？」

——” そんなこと” ってちょっとヒドいような：

『んー言葉少なめで素っ気ないところあるけど

本当はすごく優しい人だと思うよ？今はどうかわからないけど…』

こうして次第に話を自分へと持っていくのは、絵里花のお得意技。

：そうだったねアキ、昔からアキはいつも優しかった
何年経っても、人ってそんなに変わるものじゃない。

でも……13年経って、アキは：見違える程大人の男の人になってた。

『絵里花は：アキが好きなの？』

「うんっ！心配無用お？主任は他の男とは違うからあ
私、マジになっちゃったんだあ」

だから余計気になるの……

絵里花に言い寄られたらきつとどんな男の人だって悪い気はしない
はずだから

アキもきつと絵里花を受け入れてしまうんじゃないかって。

このモヤモヤした気持ちは行き先不明、それでいて：果てなきモノ
。

「：——あっ！：って事でえ、この辺で私はバイナラするねえ」

やがて：盛り上がりが最高潮に達している中でも
いつになく時計を気にしていた絵里花が

お化粧直しをしていたかと思うとすくつと立ち上がり

「今日はどこの男よ？」

「ひ・み・つうう〜♪」

奈緒が食ってかかるも、そくさルンルンとお店を出て行ってしま
って。

アキにマジって言うても

他の男の人はちゃんと確保してるんだ：さすがだよなあ。

「みゆいいの？アレほっというて」

『んー？何がー？』

「友達のターゲットが自分の兄って妹としては妙な感じじゃない？」

そう：だよね：私は何考えてるの：絵里花がアキに本気なのかとか
アキが絵里花を好きになるんじゃないかとかそんな事ばかり：

「まああの主任が絵里花を相手にするとは思えないけれど…」

そうして奈緒がテーブルに頬杖をつき

何やら悩ましがな表情をしていたのも数分で

結局、その後絵里花の男癖の話で盛り上がってしまった——そ
のすぐ後だった。

奈緒とお店を出ようとした時に鳴った携帯が

良くも悪くも、私を禁断の縁へと陥れていくことになる——

—。

「…みゆ？今の電話誰から？———どうかした？」

『アキが体調崩して今、絵里花がタクシーで送ってるって…』

「絵里花が？やっぱり主任と会ってたの？」

”男を確保してる”だなんて、私が吞気すぎたんだ
絵里花が待ち合わせしてた人ってアキだったの？

私の事好きとか言っておいて、ちゃっかり絵里花と会ってたの…？

——意味わかんないっ。やっぱり：アキが分からないよ…
そう思いつつも帰路に行く足が自然と急いでいた。

「みゆー！おかえりい」

：——程なくして辿り着いた家
その居間には、お母さんとお茶を飲みながらくつろいでいる絵里花の姿

「あら、みゆ。お帰り」

アキが途中で体調崩したみたいで絵里花ちゃんが送ってくれたの
よお」

『——アキ、は…？』

「主任は部屋で寝てるよお熱がすごーくあるのお」

まるで同じ家族だと言わんばかりに、桜木家に馴染んでいる……
他人の女のコ”

「昔から体が丈夫な子だったのに
離れてる間に変わっちゃったのかしらねえ」

私のせいだ…昨日、私が雨の中行くのを追いかけて来てくれたから…

「みゆ、アキのタオル替えて来てくれるかしら？」

『——うん…』

そう責任が後押しして、お母さんからタオルを受け取ろうとしたのだけれど

ここぞとばかりに素早い絵里花の手に、横からサッと取られてしま
う。

「おばさまっ！私が行ってきますう

みゆ帰ってきたばっかだし座っててえ〜♪」

「あらあ、絵里花ちゃんさっきから悪いわねえ？頼んじゃっていいかしらあ。

もうあんなにかわいい彼女ができてるなんてアキも片隅に置けないわねえ」

彼女じゃないって、お母さん：多分：だけど……。

絵里花のことは変わらずは大好きなのに、アキがどうこうの前に大切な友達なのに

アキの彼女かの様に振る舞う素振りを見ると、何となくいい気持ちがない。

それにしても：アキ：大丈夫かな：

そうアキの容態を気に掛けながらも手持ち無沙汰になり

着替えようとしてアキの部屋の前を通り過ぎようとしていた時
その部屋から微かに漏れた甘えた声に、眉がきゅっとシナる。

「：——大丈夫ですかあ？お薬、飲んでくださいねえ：」

私だって：、心配なのに：。

今日はアキの部屋の扉がものすごく遠く感じた…。

…やがて夜が更け、絵里花が帰ったことにより静かさが戻った桜木家

アキはきつとベッドに横たわったまま

そして私は相変わらず、アキの部屋が気になり眠れずにいた。

アキの看病で忙しそうに家を駆けまわるお母さんを、少し羨ましく
思いながら…。

「お母さんもう寝るけどみゆまだ起きてるでしょ？アキの事頼むわ
よー」

『——はい：』

だからかな、お母さんに頼まれてやっと…部屋の前まで辿り着けた
の。

薬は絵里花があげてたみたいだし、後はタオル替える位…だよね…。

『アキー？入るよー？』

そう緊張してちよっぴり損じた気分、アキはぐっすり眠っていた。

だから何となく部屋を見渡してしまう。

この部屋入るの：久し振り。

けれど変わったのは私たちだけで、この部屋は昔と何も変わってな
い。

よくここで遊んでくれたよね、遠い遠い昔……………。

それにしても、眠っているアキを見ているとちよっと笑いそうにな
ってくる

いつも眉間にシワ寄せてキリッとしてる顔とは全然違って、無防備なんだもん。

なんてクスクスと笑みを零しながらも

起こさないようにそっと、古いタオルを取ってオデコに手のひらを当ててみたけれど

お薬がまだ効いていないのか、熱さで手がじんじんする…

——私のせいで…ごめんね…。

そう心の中で呟いた——時

同時に新しいタオルを馴染ませるようにアキのオデコに置いた——

——時

吐息混じりの声が、熱に潤んだその眼差しが、私を呼ぶの——。

「…み、ゆ…？」

『ごめんっ起こしちゃった？冷たい物でも持って来るね！ちよっと待って…』

でもね、こうして面と向かうのはアレ振りだから何だか気恥ずかしくて

ベッドの脇から離れようとしたのだけれど、そうはさせてくれなくて。

とても熱くなった手に動きを封じられてしまった。

「——行くなよ…」

うつすらと目を開けて何かを訴えて掛けているようなアキの視線
昨夜の告白とは裏腹で、力なき柔らかい声

「もう少し：そばに、いてくれないか…」

いつもならもっと強く私の手を掴むのに
今日のアキの手は熱くて、弱々しくて：放っておけない…。

『うん：いいよ…』

そうして私はアキの手を、きゅっと握り返した。

——けれども。そばにいてって：

こんな至近距離で手繋いだまま一体どうすれば…。

アキの熱が繋いだ手からじんわり伝わってきて私の胸も熱を帯びてくる…

『の、喉乾いてるでしょ？すぐだから、やっぱり持って…』

「離れて行くなよ…」

それでも、子供みたいにゴネるアキがすごく初々しくて
弱ったアキがどうしようもなく可愛く感じてしまっ

『ふふ…』

「：——みゆ？何かおかしいんだよ…」

『何でもないよー、ふふっ』

アキのこんな姿ってきつとレアだよね…？

「誰のせいでこうなったと思ってんだよ」

——だ：だよね…。

「……………そう言えば、木村さんは…？」

『さっき帰ったよ』

「そうか…。」

そんな中でも、絵里花のことを気遣うアキ。

それがどうしてか、この雰囲気乱してしまうものに思えてしまうのは

ねえ：どうしてなんだろう——？

『絵里花、可愛いでしょう？私の自慢の友達なんだあ』

何言ってるんだろ、私：こんな事言いたいんじゃない：

「：みゆ以外、興味ない…」

”絵里花のこと好きなの…？”と

本当はそう聞きたかった私に、アキは心見透かしたように答えてくれる。

この時はそんな熱い想いが、たまらなく嬉しくて。

「昨日は：沢田と会ってたのか」

『えっ！何で知ってるの…？』

だから浸っていた心がいきなりのツツコミに、驚いてしまう。
今日、絵里花に聞いたのかな…：ほんっとお喋りなんだからっ：

「みゆは：沢田が好きなのか？」

『んー、何かそういう対象にはまだ、見れないってゆーか…』

何か、お兄ちゃんに恋愛相談してるみたいだな…って！そのまんま…っ

『アキい、寝た方がいいよ？寝付くまでここいるから、私』

なんて、一人でドギマギして何やってるんだろう私：

アキの目がどんどん虚ろになっていく——…。

「——みゆ…？」

けれどね、アキ：布団に隠れて繋いだ手がすごくイケナイ事をして
いるみたいで

無性にドキドキしちゃうよ…。

『ん——？なあに？』

「簡単にキスされてんな」

っ…、それって…？出逢った日と昨日のこと言ってるんだよね？

「嫌だったら拒めよ。そんなスキだからつけ込まれるんだ」

アキが：それを言っちゃうの？アキも大差ないじゃない…。

そんな事言われたって、自分でも何で拒めないのかわからないんだ
もん。

「俺は、もうみゆを妹としては見てやれない…」

なのに、いつもそう…。戸惑っている暇なんて与えてはくれない。
目をつむったまま呟くようにそう伝えるアキが
たまらない気持ちを運んでくるの。

「もうみゆを泣かせたくない。

だから：嫌なら俺を拒め。みゆを：——大事にしたい」

アキ……。胸をぎゅっと摘まれたように切なくなる

それにも増して温かく熱い何かが内の内からこみ上げてくる。
きつとずっと：そんな行き場のない気持ちを抱えていたの…？

「——でも：叶うなら…みゆに愛されたい…」

アキの想いが熱い手からどつと流れ込んで来て

その想いが巡り巡って私の目をゆっくりと潤してゆく…。

「好きになって、ごめん、な…」

ア：キい——…。

音も立てずにこぼれ落ちる涙の雫のお陰で

シーツを浸らせるシミは大きくなるばかりで。

眠りに落ちたアキの寝息でさえも涙が流れる理由になっていた。

繋がれたアキの手の温もりが、こんなにも愛しい

ねえ——愛しいの…。

#9 イトしい温もり ―?― (後書き)

やっとココまで来ましたーあ♪

今の私からしてみるとこの辺、ウブすぎて笑える!! 爆
さすが処女作の拙さ爆裂なのです☆

次回やっとう第2章に入れる…かな? 長くてすみませんっ。。

じれじれさせながらも、着実に溺れさせてゆきますね♪
読んで下さる方皆さま、心より感謝致します*

◎ Introduction

——ねえ、アキ：覚えてる？

いつでも頼もしかったアキの看病を初めてしたあの夜

熱で意識飛び飛びだったみたいなのに

お布団の下で繋がれた手は、きつく絡めたその指先は
決して私を離してくれなかったよね。

今でもこの手に残っているよ……あの日の手の温もり。

アキの本当の優しさに初めて涙を募らせた日だったの

アキの本気の気持ち初めて素直に感じれた時だったの

だから……アキを近くに感じたい時はいつも思い出すの

あの日この時この心に刻まれた、その 情熱を……。

ねえ、アキ……？

このアキの温もりを思い出せなくなるまで 後 どれ位なんだろう
ね……

けれど私は いつも祈ってるよ。

消さないで…

私からアキの温もりまで 取り上げないで……—

#10 アンフェアな駆け引き

side アキ

……朝……か……

目覚めたのは、熱のこもった布団の中

うつすらと視界が映し出すのは、カーテンの隙間から微かに希望を魅せる零れ日

昨夜は確か：木村さんと飲んだ後、家まで一緒に来て……みゆ……？

手に微かにみゆの温もりが残っている様な気がするが

ここで何を話したのだろうか、俺は何を口走ったのだろうか
熱で頭が朦朧としてたせいかな、あまり記憶が無い。

「……ア、アキい？調子どー？」

そんな時ドアの隙間から覗かせたみゆの表情で、安堵が胸を撫で下ろす。

見ればすぐに分かる、傷つける様な事は言っていない様だ。

『ああ、大分いいよ』

「そ、か。ならよかった……」

……いや、何かがおかしい。やけに俯き加減で俺を見つめている。
俺の、気のせいなのだろうか……？

『……どうかしたか？』

「ううん、何でもない……会社、行けそう？」

『ああ、赴任早々これ位で休めないからな』

そうして、いつもとは違うみゆの妙な雰囲気になりながらも通勤を共にしていた時だった
執拗に目を擦る、みゆのあからさまな異変に気づいたのは。

『昨日寝れなかったのか?』

「…アキが手、放してくれなかったから……」

寝不足と言うよりも、それを理由に隠そうとした涙の跡がそんな可愛い証拠を隠しきれていないお前が頬を赤く染めてコクリ俯いているみゆが……可愛くて仕方がない。

『——みゆ——』

「んー?」

『昨日はありがとな?』

さすがにまだ熱が下がり切っていないせいか、まだ頭が重くダルさが残る

けれど、みゆの温もりが残るこの手を感じると

そんな事はどうでも良い、些細な事に思えた。

：———そうして、新宿西口のビル街に差し掛かった頃みゆと並んで歩いていると、遠くからみゆを呼ぶ声がする
悪さを犯した訳では無いが、存在自体が俺を憤らせる奴の。

「みゆさーん!…おっと!主任もいたんスね!兄妹仲いいっスね?」

沢田…。まずは上司だろ：気付けよ：

「沢田君いつも爽やかだねー！」

——は？脳天気なだけだろ：

「みゆさん、今日も可愛いっスね♪」

「そ、んなこと：——」

ふざけんな、俺が言いたかった事を先に言うな。

：と色々言ってやりたい所だが

苛立ちを収め、会話を聞きたい振りを買きつつも

上司の俺を差し置いて、さもみゆしか見えないかの様なひたむきな
沢田に

大人げなく敵意を感じていたんだ。

「みゆさん！今度飯食いにいきませんか？

うまいんスすよーあそこのパスタとピザ！」

『うーん…そうだねー』

それ故に、みゆの瞳がチラチラと俺を頼ろうものなら、俺はわざと
目を逸した。

「ピザ生地は手打ちなんスよ、運が良いとパフォーマンス・ショー
が見れて…」

「あははっ！それすごいねー！」

だがフと視線を向けると、いつしか記憶に遠いみゆの笑顔が舞って

いた。

俺の前では困った顔や泣いた顔が多く
あんな風に笑うみゆは、遠い妹の記憶を辿った先にしかない。
俺にはみゆを一生、笑顔にする事はできないのだろうか。
この想いが朽ち果てるまで――。

みゆと沢田が眩しい太陽の日の光を浴び
明るい場所に居るのを俺は、微笑ましくも……羨ましく思った。

――所は変わり、出勤後のオフィス

主任室の扉を潜るなり颯爽とやって来た、悩みの根源……木村さん。

「風邪、もういいんですかあ？」

『ああ、昨日は悪かったな』

「主任なかなかお菓飲んでくれなくて困りましたよお」

ついでに俺の目の前でこうして彼女ヅラを振る下げている訳だが
うちの家に来てそんな事までしてたのか……みゆの前で……。

みゆの友達じゃ邪険にする事もそうそうできないと

当たり障りなく接していたつもりだが

手遅れにならないうちにきちんと断ろうと

今この時早速に、昨夜の続きを話そうと木村さんを誘ったんだ。

だが：木村さんがあんな爆弾を抱えていた等
思いもしなかったんだ――……

選んだ場所は、手短に済ませようと新宿東口のとある店
前歴がある為、変な気を起こさない様にと選んだ健全も健全な創作
居酒屋。

「主任が誘ってくれるなんて嬉しいですよ♪」

『…早速だが、君と付き合う気はない。それが言いたくて今日誘ったんだ』

「まだ来たばかりですよ？いきなり随分シラケる事言うんですね
え…」

空気読めなくて悪かったな…この女といると、どつと疲れる…と
疲れを洗い流す様に俺はビールを口に流し込む。

「遊びでもあたし構いませんっ
彼女いないならそれ位いいじゃないですかあ」

…本気で言ってるのか？何故そこまで俺に執着してくる？
そう、どう話を切り返そうかとフと目を泳がせた時だった
見慣れた人影がこの目を貫いたのは。

『——兄貴…？』

先陣を切って店の店員に案内される…兄貴

そしてその兄貴が柄にも無く肩を抱いている女性は…みゆの友達の…

「あれ…え？奈緒…と専務だあ」

『あ、ああ』

——岩崎さん？

何か見てはいけないものを見てしまった気がして、声を掛けられる訳が無い。

「こんな会社の近くで会ってたらすぐバレちゃいますよねえ？」

バレるって…

『2人はそういう関係なのか？』

「もおおお。ヤボなこと聞かないでくださいよお」

参ったな…まさか兄貴が…。

店内に俺達が居る事に全く気づいていない兄貴と岩崎さん

その傍らでカシスウーロンをひたすらおかわりしている木村さんと焼酎グラスを片手に呆然としたまま、遠くの席を見つめるだけの俺。

極普通の恋人たちの様にイチヤイチヤしている訳でもなく

大して会話を交わしている様子もなく

しかし、そう言う目で見ればやましい関係に見えなくもない。

こんな場面に出くわすとは…驚いたな…あの兄貴が浮気かよ？
やはりワケありだったか…

「主任〳〵話聞いてますう？」

——それより今はこっちか…

『……好きな女がいるんだ。悪いな、木村さん』

「えーっでもその人とは付き合っていないんでしょう？彼女居ないって言ってたしい

ならあたしと付き合ってくれてもいいじゃないですかぁ♪お試しでも可♪」

しかし思ったより食いついてくるが故に、断固としてコレを貰っていたんだ

こう言う女は自分を見てくれない男には、すぐに愛想を尽かすだろうと。

『もうあいつしか見えないんだ、それに君みたいな女に興味無い』

するとあんなにお喋りだった木村さんの口が、途端に塞がる。

これだけハッキリ言えば木村さんでも引くだろうと、俺は甘くみていたんだ。

「それなら仕方ないですねえ……」

そう言う木村さんの声のトーンが少し下がり

やっと納得してくれたか……そう思ったのは、ほんの束の間だった。

「あたしいゝ実は見ちゃったんですよねえ……」

主任が来る前の日の夜みゆとキスしてたのお」

——突然に飛び出したタブーは、俺が耳を疑う間も与えない程の衝撃だった。

「知らなかったんですよねえ？」

まさか知ってて妹とキスなんてしませんもんねえ？近親相姦ですもんね〜」

アレを見てたって言うのか…？

『それを、みゆには…？』

「言ってますんよお？みゆ隠したそうだったしい」

『なら何故俺には言う？』

「ムフフ♪駆け引きですよ。主任とキスなんて羨ましいなあ」

みゆに言っていないだけまだマシなんだろうが…：駆け引き？

俺がソレを口に出しただけでも怯えたみゆに、言うっていうのか？
だがもうその事は俺達にとってはタブーじゃない

そうと分かっているても木村さんの事だ：みゆにどういう言い方をするか…

「そーんなにみゆに言わないで欲しいんですかあ？」

人の顔色読むのが上手いな…本気で言うとは思えないが。

『…俺に何をして欲しい？』

少しでも、みゆの笑顔を壊す事は絶対にさせない…。

「うーん。主任の彼女にして欲しいなあ」

『何度も言わせるな君を好きになる事は無い。

好きじゃない女と付き合う程暇じゃないしね』

とキッパリ言ったものの、好きだからと言い女と付き合った過去は無く

体の関係を持ったどの女を好きだったかさえも疑わしい位だ。

「そこまで言われちゃうとなあ

主任冷たいし、彼氏にしてもおもしろくないかもなあ」

入れ込むのも速攻となれば飽きるのも早いつて訳か？

まあ、俺としては好都合：

「じゃあ〜キス、してください♪」

——は：？何でそうなる？

『諦めたんじゃないのか？』

「せっかく駆け引きしてたのに何も無しでは帰れませんよお」

呆れた：ま、そんな位の事で済むなら俺としては楽でいいが。

「でもおみゆにしてたみたいになんとしたキスですよお？」

『そんなじっくり見てたのか：悪趣味な女だな：』

楽しそうに笑っている木村さんの仕草を見ると
小悪魔に見えてきて仕方がないのだが。

「してくれたらあみゆには絶対言いませんからあ」

：キス位でみゆの笑顔が守れるなら安いものだと
俺は安易に考え過ぎていたのだろうか。

『分かったよ、約束は守れよ?』

「神に誓いまあす♪じゃあゝ帰り際に夜空の下でえゝ」

木村さんは遠くを見つめて妄想に入っている様子の木村さんがこの時は煩わしくて仕方なかったんだ。

『こっち向け、——今してやるよ。』

——キス位でそんなに嬉しいのか…? 女って、不思議だよな：木村さんは満足したみたいで案外あっさり帰って行く。それが故に、この件はキス一つで解決したのだと：勘違い甚だしかった。

「まだ風邪治ってないのに…こんな時間までどこ行ってたの?」

しかし俺は、何にも気づいていなかったんだ。

家に帰ると、居間のソファで一人テレビを見ていたみゆを目にしただけで

何故か安心感と安らぎが、この胸に訪れる。

『——母さんは?』

「んゝなんかね、大学時代の同窓会で今日遅くなるって。」

『そうか…』

だからか、特に何を考えていた訳でもないが自然と体が引き寄せられみゆの座るソファの隣に気だるく腰掛けた。

「だい、じょうぶ——? まだ体、つらいの?」

『ああ』

みゆがそばにいる：それだけで今日の疲れも全て吹っ飛ぶ様な気がした

みゆがテレビを見て笑っている：それだけで俺がここに居る価値を見いだせた

そして俺は想いのままに、みゆの小さな背中を後ろから抱き締める。

「アキ？ 酔ってる、の：？」

『ああ：』

こうされても抵抗しないみゆは俺の事どう考えてるんだろうな
そんな事を頭の片隅で想像しながら。

他の女なんかいらぬ。みゆだけが欲しい…。
だからこそ、キス位何でもないと思っていた
さっきの事でみゆを守れた気でいたんだ

——だが、俺は浅はかだった。

あの夜の事をみゆに暴露されるよりも何よりも
みゆの笑顔を奪ったのは他でもない——あのキスだった…。

#10 アンフェアな駆け引き（後書き）

こんばんわ！最近更新率が高い如月らむです♪

いやいや、早くですね、あの scene が書きたくてですね・
決して欲求不満とゆうわけでは：↑墓穴。爆！！

けれど。ここらへんのアキみゆの気持ちは

大事に大事に書いてあげたかったので

完全版を書いて改めてよかったと思います。

それもこれも、読んで下さる方がいてこそものなので
皆さまには本当に感謝しています♪

では、お次らへんでらぶに突入しますので
引き続きよろしくなのです☆

#11 スキとキス

side みゆ

『：――ねえ奈緒、今日の絵里花どこか変じゃない?』

「昨日、主任にアタックして玉碎いたらしいよ?」

アキの看病で目を腫らしていたその日の朝

いつもと同じように、奈緒と絵里花と社内の更衣室で着替えていると明らかにいつもと違うことが、――1つ。

常にハイテンションを絶やさない絵里花が珍しく今日は大人しものだから

相当アキに入れ込んでたんだ：と申し訳なさが胸を掠めていたのだけれど：

「：コホン、コホンッ」

どうやらそれだけが理由とゆうわけではなさそうで。

体調悪そうに執拗に咳込んでいたりする。

もしかして絵里花も風邪引いちゃったの?

「コホン!!コホンッ!!!!!!」

それも相当ひどいんじゃない??

『絵里花?ねえ大丈夫?』

「：……、それ。主任のもらい風邪?」

「えっわかるう?」

「なーんだ、元気じゃない。心配する事ないわよみゆ」

けれど。心配して損したよ…

奈緒のセリフに飛びついた絵里花の表情は、途端にキラめき出す。結局、絵里花の風邪疑惑は嘘で、今日も変わらず元気そうで何より。そう安心をしている傍らで、嬉しそうに咳込む絵里花が少し羨ましかった。

——もしも。兄妹じゃなかったら：アキがお兄ちゃんでなかったら…

この頃から私はそんな事を思い始めていたのかもしれない。

：——そんな時、思いもよらぬ喜びが舞い込むことになる。

あー目がカスむ…パソコンの文字ってずっと見てると絶対目に悪いよね

なんて心の中でブツブツ呟きながらも

オフィスで通常通り仕事をこなしていた私を呼ぶ…その、声によって——…。

「何回呼べば聞こえるんだよ…桜木さん！」

『——はっハイ！』

”桜木さん”なんて呼ぶからわからなかったよ…アキ……

「君の企画した例の香水のコンセプトが今、企画会議で通ったから」

う、そ！あのコンセプトが通ったの？信じられない…

今年からちゃんとした仕事を任されていた私が一任されていた
少し先のクリスマスに向けての新作開発。…その商品とは

——クリスマス用フレグランス——

”愛するあの人に会う時に、恋人たちの特別な日に。
彼氏が彼女を抱きしめたくなるような香水”

企画会議で通ったってことは：私が企画した香水が商品化するって
ことだよな…？

「試作品の段取り行くから、着いてこい」
『——はいっ！』

仕事が認められたとゆうよりも、自分の想いを沢山の人に届けられる
それが嬉しくて嬉しくて：飛んで跳ねてアキの背中を追った。

パッケージ、そしてボトルのデザイン

何よりも大事なのは香り：男の人を愛しい気持ちにさせる
魅惑的な香りでなければいけない。

そう心を弾ませ、試作品を形にする為に
アキと私は色々な業者を回った。

「：——腹減ったな、何か食うか」

そしてそれも後一社を残した夕方頃、西新宿の裏路地をヘタヘタ歩
いていると

偶然にも沢田君が言っていたらしきイタリアンのお店を見つける。

だから何となくお店前の看板に足が寄ってってしまったんだろうな：アキは一言「ここにしよう」と言って、ここで食事をとることになったの。

さり気ない態度で示してくれるそんなアキの優しさが嬉しさを倍増させていく：

そんな喜びに浸っていたのも束の間で。

美味しいイタリアンを堪能しながら最初は仕事の話をしていたもののアキの直球は私の心に少しも休む暇を与えてくれない：

「…」抱きしめたくなる香水”ねえ…。

こんなん無くても、俺はみゆを抱きしめたいけどな」

うあつ、キザ…って心の中で突っ込みながらも顔に熱を帯びてくる。

アキにしろ、沢田君にしろドキドキさせるような事ばかり言ってくれちゃって

こんなんじゃ私の心臓がもたないって：

何とか、この場を乗り切らないとアキのペースにやられちゃうよ…：

『ほ、ほんとこのキザおいしーっ！』

あああつ！まずーいっピザとキザがあつ…ドッキング…：むしろ失態。

「…：悪かったな、キザで。」

きつとだからなんだ、私のこんなお粗末にアキは怒ってる。だって、無言で黙々とピザを食べ続けてるんだもん：

けれどアキのご機嫌取る方法を知らない私は、シュンと首をしなだれさせるしか
術はなかったのだけれど：

「このベーコンキザもうまいな」

アキのキザ返しに、思わず笑わずにはいられない。

アキもそんなこと言うんだあ：！

「何だよ、みゆが言い出したんだろ？」

『あはっごめえんっ』

顔にも性格にも似合わない、おかしくて仕方なかった。

「あんま可愛い事言うなよ：我慢できなくなるだろ」

：のに。：またそんなこと言って：。

結局こうしてドキドキさせられちゃうんだよなあ

ほんと、アキにはかなわない——。

：——やがて

とりあえずの空腹を満たした私たちは私達は仕事に戻り
最後目指すは、香り自体を配合してくれる業者に向かう。

今日は担当業者さんの出してくれたフレグランスから

配合する香りを選ぶ作業：なのに

業者の担当者さんがフレグランスのサンプルをズラリ並べてくれても

どんなに大きな仕事を任されていても、アキのことを考えずにはいられない。

私はアキの気持ちをどう受け止めたらいんだろう：

アキは恥ずかしい位に気持ちをぶつけてくる

それが心地よくなってて私は、自分の気持ちをなるべく考えないようにならなければならぬ。

と言うのも、私が答えを出してしまつたら

それがどんな答えであつてもお兄ちゃんとしてのアキか男の人としてのアキを

きつとどっちかを必ず失ってしまう：そう考えると怖くて仕方がない。

沢田君のことだつてあるのに、こんなにアキで一杯になつてゐる：

アキは、何で私を好きなんだろう？私のどこが好きなんだろう？

そうして私の企画を一生懸命になつて形にしてくれようとしている主任を

チラチラ盗み見していたものだから案の定、痛いツツコミを受けてしまう。

「何ボーつとしてゐるんだ、今日は上司として着いて来てやったがお前が担当だろ

――候補はあげられそうか？」

だから慌てて、一番手前に置かれた試供ビンを手を取った。

20種類も出された候補はどれを匂つてもいい香り。

メインに使用する香り、その他を混ぜ合わせる分量配分

決めなければいけないことは沢山あるのに、どれもピンと来ない。

あんなに一生懸命になってくれる沢田君にもいい顔をして
アキの気持ちも知りながらこのままでもいいと思ってる
自分の気持ちさえも分からない…

コンセプトにある大人の女性とは程遠い自分に気づかされるよ…

『…——主任は：どんな香りにそそられますか？』

男の人が女の人を抱きしめたい時って、どんな時？
どんな時に、アキは私を抱きしめたくなるの…？

「…——さっきからどうした？体調でも悪いのか？」
『うん、ちょっと…』

——結局、仕事に全然身が入らない私を見るに見かねて
アキは香りのサンプルを持ち帰る許可を取ってくれた。

普通上司なら怒っているべき所なのに…：仕事場を離れた途端
アキが優しく声を掛けてくれるものだから胸にチクチク響く…。

そんなアキの優しさにこれ以上触れるのが今は怖くて
体調が回復した振りをしてなるべくいつも通りに過ごした。

——そうしてずっと逃げていたなら…：茨の道をあなた一人
で歩ませていたの？

我が社は大企業、その重役も参加する会議で企画が通るそれはしがないOLにとっては、またとないチャンスなのにその日家に帰りテレビを何となく見ながらも病み上がりなのにこんな時間までどこ行ってるんだろうとアキの帰りが心配でなかなか寝れなかった。

なのに、ようやく帰ってきたと思えば私の隣に座って抱き締めてくるの。

お母さんがもう寝てしまったことを良い事に。

その、上司とも兄とも違う男の声で：この、真っ直ぐな愛しさを乗せて。

「みーゆ：頑張れよ：仕事。そして俺を誘ってみせろ」

同じソファーに座ってるだけでどうしようもなく胸が高鳴るのにこんな風に抱き締められたら：このままじゃアキを：

——アキを……？

この腕に思わず：手を添えてしまいそうになる私は：

——私は……？

本当にアキをお兄ちゃんだと、思ってる…？

もしかして：もうとっくにアキを男の人として意識して、た…？

自分の気持ちが分からないなんて大ウソ。

兄妹で愛し合うなんてあっちゃイケナイ事だって：私は正当化したかっただけ

イケナイ想いだって分かってるはずのに

アキはどうしてこんなに自分の気持ちに素直でいれるんだろう？

やめて：アキ：このままじゃ、本当に好きになっちゃうよ…。

そう思いながらも、何でなの：アキの腕を振り解けない――

！。

そんな密かな気持ちに気づきそうな時だった

アキが絵里花にキスをしたって話を聞いたのは…。

それは就業後のこと、着替えを済ませるといつも向かう化粧室で、お花畑を背景に背負った絵里花の口から。

「……あの主任が？ まっさかー！ 夢でも見たんじゃないの？ 妄想乙
」

けれど奈緒は信じられないと話半分で聞いてたみたいで、私も賛同してウンウン頷いていた、信じられない：信じたくなくて。

「ほんとだって！ 主任ったらねえ？ お店の中に人いーっぱい居たのに強引にキスしてくるんだもおん：困っちゃあう！」

……強引、に？ アキが？ そう：アキはいつも強引に：

「主任てキスすんごく上手いの。もうメロメロになっちゃったあ」

……そう：アキのキスは、それだけで堕ちてしまえる程に巧い…と思う。

奈緒は最後まで半信半疑で絵里花の話を聞いていたけど
多分絵里花の言ってることは嘘じゃ、ない。

そう確信した途端、心に薄暗い雲が広がっていく：

——どうして：どうしてなの？

絵里花の話すアキは私の知るアキと同じ人物なのに、同じじゃない。
兄と妹とゆう間柄なら普通そんなものなんだろうけれど
それがどこもなく寂しくて、無性にもどかしくて。

：気づいてしまったの、絵里花にやきもち焼いてる自分に。
わかってる：私はアキを責められる立場ではないのだけれど…。

——だからね、せめて信じたいの：私がいつも見てるアキを。

そう無理矢理波立った心を落ち着かせようとしていた：その日の夜

明日の会議に提出する企画書を仕上げる為

OLの分際で珍しく長い長い残業を強いられたいた時のこと

それでも絵里花に聞いた事実が頭の隅々まで支配していて
パソコンの画面さえロクに見えていなかった時のこと
誰も居ないはずのシーンとした廊下から聞こえる足音

もう9時だもんね：さすがに警備員さんに怒られるかな？：と
パソコンの電源を切りデスクを片づけていると、悩みのタネが：顔
を出す。

「：——まだ居たのか？」

『主任こそ：まだいらしたんですね…』

「いや、さつき帰ったらみゆが残業していると母さんに聞いて…」

私の知ってるアキが——ここにいます。

それは優しさ？心配？——愛情？

そんなこととても本人には聞けないけれど

実家の最寄り駅からアキとトボトボ歩く帰り道

付かず離れずの大きな背中を見ていると悩み事が募り募って
つい口から溢れてしまった。

『：——ア、アキは！絵里花が好きなの？』

「何だよ急に？みゆ以外興味ないよ」

なのにアキってばまた平然とキザなセリフを言っただけから
どうしようもなく胸が高鳴るのと同時に、矛盾が心に寒い風を吹か
せる。

『じゃあ何で絵里花にキスなんてしたの：？』

「……すれば今後俺に付き纏わないと言うからした、ただそれだけ
の事だ。」

キス位どうって事ないだろ？」

どうって事ないって、そんな：

『頼まれれば誰とでもするの？好きでもない人とアキはキスできる
んだ？。』

「気持ちが無くたってできるだろ。子供じゃあるまいし」

私の知らないアキが——ここにいます。

『：そんな適当な気持ちでキスされた方の気持ちはどうなるの？』
好きのキスと好きじゃないキスって何が違うの：？全然わからないよ……』

何で、涙が出てくるの……

「——ごめん、みゆ……」

何で、謝るの……？そんな言葉を聞きたいんじゃないよ。

絵里花の気持ち知っててしたの？絵里花あんなに嬉しそうにしてたのに

好きな人にキスされたら誰だって嬉しいはずだよ

それを：アキからするなんて……違う。私、絵里花とキスしたアキが許せないんだ

「泣く事ないだろ……みゆに泣かれるとどうしていいか分からなくなる。」

少し、話し寄り道して帰るか。」

駄々っ子みたいに立ち止まった私に近寄るアキの優しさが齒がゆい。
なだめる為に肩を抱いたアキの手は、やけに暖かい。

そして私の中に芽生えているモノは、限りなく……——愛しい。

アキに手を引かれるままに足を引き摺り
やがて辿り着いた場所は、かろうじて電灯に照らされた暗い暗い公
園で。

今でも微かに記憶にある：この大きい公園、大好きだったから。
私が幼い時、タカにいとアキがよく連れて来てくれたよね。

大好きなお兄ちゃん2人に構ってもらえて：——それだけで。
あの頃の私は幸せとゆうものを感じていた。

そんな記憶に少しだけ涙に笑みを浮かべながらも
中央に位置する大きな池に架かった橋の上まで来て、アキは語り始
める。

「：正直、みゆが思っている程大事な物とは思えない。
いつも義務の様にしてたんだ、すれば女は喜ぶしな：一種の精神
安定剤だと」

アキ？何の、話：？キスの、こと——？

「だがおかしな話だよな：出逢ったばかりのお前に、俺はキスをし
た。

今思えば：衝動に駆られたとは言え、感情がそうさせてたんだ」

程なくして池を眺めていた視線を私に向けるアキ
その真剣すぎる切れ長の目は：変わらず私の動作を縛るもの。

「——俺も、最近知った。気持ちがあるのと無いのでは全然違
うんだ

今でも：こんなに：みゆにキスしたいと思ってる：」

そして：私の頬を撫でる指先は
ゆっくりと近づいて来る唇に奏でられた優しい声は
鼓動高き胸を、この上なく締め付けるもの。

だからアキにキスして欲しいのだと、そっと目を瞑って見たのだけ
れど：

「——みゆ？何考えてんだよ」

——ええ……？

「何でそんなに簡単にされるんだよ」

『：アキがしようとするから…』

「迫られれば誰とでもするのか？」

だからスキだらけだって言ったんだ、俺は」

いつもなら強引にでもするくせにどうしたの、一体…？

『なっんでアキが怒るの？』

「嫌なら拒めって言っただろ？」

拒めって言われても：したいって思えちゃったんだもん。
それがそんなに、ダメな事なの…？

『：嫌じゃない場合は——どうしたらいいの…？』

ねえ教えてよ、アキ——…

#11 スキとキス（後書き）

こんにちわ！如月らむです。

やつとここまで来ましたー♪

そう言えばあったあった！なんて思いながら

みゆ企画のフレグランス初登場 scene を修正していたワケなの
ですが

コレは終盤・完結編まで重要な役割を果たしてくれるアイテムなので
覚えていて頂けたら嬉しいですよ。

ココらへんを書いていた当時はそうだな：

兄妹とは言え、みゆにはごく普通の恋愛をしてもらいたいと

願いながら書いていたような気がします。

なので、禁忌的な危機感は全て side アキに押し付けていたとゆ
う！へへ。

普通で感覚で恋に堕ちていくみゆ、罪悪感に苛まれていくアキを
今後とも温かな目で見守って頂けたら嬉しいですよ。

今回は side アキより、両想い？キッスをお届けします♪

#12 聞きたいコトバ

side アキ

：——とある平日、仕事の合間に外へ繰り出し部屋を探しに來ていた。

母さんが居なかった事をいい事に

家でみゆを抱き締めるなんてあつてはイケナイ事なんだ

そう：俺の気持ちはもう抑え切れない所まできていた。

みゆの薄着な部屋着を見るだけで風呂上がりのうなじを見るだけですぐにでもこの手にかけてしまいたいことになる：もう限界だ：

それ故に一刻も早く、と思った俺は物件を内見したその場で契約をしてきたんだ。

その発端は：「仕事中に」みゆにどんな香りにそそられるか」と聞かれた時の事。

公私混同等あり得ない俺が、仕事中に女の色気を感じずにはいられなかった。

たまにする大人の女の顔は

いつもとのギャップがあつて妙にそそるんだよな：

きつと俺は、みゆがどんな香水をつけていようがクリスマスだろうがそんな事はどうでも良いんだ。

——みゆが「女」で居てくれるならば、それで。

そんなどうにもならない想いに悩む場所は、やはり社内の喫煙所。

各部署の長が集うトップ会議までの時間を潰すにも、もってこいの場所だ。

何故かここは落ち着く…そうして深呼吸をする様に煙草を吸った。

「：——おっ？アキじゃねーか。よくここで会うなあ？お前も会議出んだろ？」

『あ、ああ：』

：すると再び兄貴と出くわす事になる。

社内には喫煙所が一箇所しか設置されていない為、偶然とは言えないのだが

兄貴に会うのは先日、岩崎さんとの関係を知った日以来だった。

あの夜は確か兄貴達は、俺と木村さんの存在に気づいてはいなかった。

ならば知らない振りをしておけばいいか、わざわざ言う事も無いしな。

「アキ、この間あのレストランにいたんだってなー？」

そう言葉を呑み込むつもりではいたが、意外にも兄貴から話を持ち出してきた。

恐らく、木村さん経由岩崎さん伝いで聞いたのだろう。

「奈緒はな：俺が結婚するずっと昔に付き合ってた女なんだ」
『それが今まで続いていたのか？』

「いや、いわゆる元カノだ。」

偶然、奈緒がここに入社してきて焼け木杭に火がついたって訳だ」

元カノか：そりゃまた厄介だな：

『兄貴が結婚してる事は？』

「承知の上さ。先も無い、イケナイ事だとは分かってるんだがなあ。ついなあ：」

ああ、分かるよ兄貴：俺も似た様なものだ

いや兄貴より遙かに酷いかもしれないな、他人に越した事はない。

「でもアキもよく声掛けてくれりゃよかったのによ」

いや、できないだろ：

「幸せにしてやれねー相手を愛しちまうと辛いよな…」

幸せにしてやれない：か：その通りだな、兄貴：

どうあがいたって俺はみゆを幸せにする事はできない：最終的には絶対的に。

『それでも：好きなんだよな…』

「アキ、お前もそんな辛い恋愛してんのか？」

『近い：ただだけどな…』

いつも陽気に見えて、兄貴もとんでもねーものを抱えていたのだと思うと

仲間が出来てほんのり安堵が胸を撫で下ろす。

「絵里花ちゃんとうまくいってないのか？」

ああ、木村さんの事か…と言うより

木村さんは一体何をどうねじ曲げて岩崎さんに伝えたんだ？

『木村さんとはそんな関係じゃないよ』

「2人でいたんだろ？ あん時。」

アキも直属の部下に手出すとはなあ」

まあ、ある意味直属の部下に手を出している事には変わらないが。

『木村さんには断ったよ』

「おっモテモテ武勇伝出たか？」

兄貴…、この流れでよくそんな事が言えるな…

「うまくいってないのか？ 例の彼女とは。」

その話じゃ絵里花ちゃんじゃねえんだらう？」

うまくいくも何も…兄貴もよく知る——妹だ。

『どうすりゃいんだらうな。気持ちの寄り所が無いんだ…』

だからいつも直接みゆにぶつけてしまう…

「んな脈無い女ならやめちまって他当たれよ

アキだったらいくらでもいんだろ？ 涼子ちゃんとか元気かー？」

そんな簡単な問題じゃないんだ…

『もう：手遅れなんだよ…』

「アキお前、成長したなあ。アキにも出来たか、そんな女が」

そんな時フと過ぎったのは、日本に来て早々飯食った時に兄貴が言っていた事。

それが今になって理解出来る気がした。

”本気で好きになれる女ができれば変わる”：か：

お陰で戸惑いっぱなしだ：

妹を愛して、抱き締めて、キスして：ほんと何やってんだ俺は：結果、みゆをいつも困らせてるじゃないか。

そうして心配そうに俺を見守る兄貴が何を言い出すかと思えば

「俺が：言ってやろうか？」

子供かよ俺は：

『いや、遠慮しとくよ…』

兄貴の性格って謎だよな…。

「んな暗い顔すんなって！みゆを見てみろよ」

男がいくら出来なくてもあんなに無邪気に生きてるじゃないか！」

ここ、笑っていい所か…？

『……みゆは：何で男ができないんだ？容姿もそんな悪くないだろ』

口が裂けても言えないが、可愛いくて仕方がない位だ。

「あいつもなあゝアキと似てるとこあんだよな」

俺と似てる…？

「俺が見る限りじゃあいつ本気になった事がねんだよ。
それに加え控えめな性格だろ？」

なるほどな…

「あんつなに可愛いのになあ」

『そうだな…』

「ダメだよなゝ俺は昔っからみゆにだけは弱いんだ」

そう言えばそうだった。

父親代わりって言っていい位にみゆの面倒を見てたのは兄貴だ
そんな兄貴のみゆへの気持ちを考えると、胸が張り裂けそうに痛んだ。

「アキ、俺みてえに後悔だけはするな？」

今は今しかねーんだ。どんなに虐げられる事があっても

止められねんなら思うまま突っ走れ」

それと同時刻に、煙草の火を消しながらも俺に向けられた真剣さ
その兄貴の言葉は俺の胸に深く刻まれずにはいけない。

全く：兄貴のたまに出るいい言葉は格言みたいだよな…

「同じ思いをお前にはして欲しくないんだ。

行くぞ、——会議が始まる。」

『ああ：』

サンキュな、兄貴：お陰で少し救われた気分になった。

とは言え、兄貴の可愛い妹を愛してしまったその罪は、いずれ償うよ…。

そうして頭を切り替えた俺は、少し軽くなった足で会議室に向かった。

——その日の事だったろうか。

会社で一人残業をしている様子だと母さんに聞き

こんな時間まで1人で会社にいるのかと思うと

実家を飛び出し自然と会社へ足が向いてしまった、春風を追う季節口実等何でもいい：ただみゆに会いたいと心が嘆いた夜：やがて

”何故、俺が木村さんにキスをしたか”

その事情にどうも煮え切らないでいるみゆと、寄り道した——

——大きな公園。

初めは、突然大きな仕事を一任されたが故に頭の中が混乱状態にある為

俺に突っ掛かっているのかと思えばそうでもない様子で。

できる事なら言い訳の一つでもしたかったが

自分の親しい友達があのかすを見ていたとなれば

みゆは再びその瞳を潤ませ思い悩むのだろうと

ましてやその女が俺に気があるとなれば、友情にヒビが入らないとも限らないと

本当の理由を言う訳にはいかないが為に

俺は断固として口を割る気は無かったのだが：しかし。

キス一つでムキになるみゆが不思議でならなかった

どう生きてきたらその歳でそんなに純粹でいれるんだ？

俺の冷めた情を受け突然泣き出すみゆをどう扱っていいかさえ分からない。

守りたい筈のみゆがまた泣いている：

家族——？兄——？それは禁断故に幸せにできないの問題以下で

俺はみゆの笑顔一つ守れないのかと思うと

今まで自分がいかに粗末な恋愛をして来たかが明らかに浮き彫りになっていた。

確かに、気持ちが入ってなくてもキス位できる男だよ、俺は。

だがな、違うんだ、みゆ。

したいと思うか、何も感じないか、それだけで全然違う。

みゆにしたものと木村さんにしたものでは

俺にとっては何もかもが違うんだ、いつでも本当は——みゆだけ欲しい。

しかしまた困らせるのかと思うと、そうも言えず

終いには俺のキスに抵抗できないみゆを見ていると

自分とみゆの気持ちの差を思い知らされる様な気になり居たたまれ

なくなる。

——だがその時、予想外の言葉をみゆが口にした。

「：嫌じゃない場合はどうしたらいいの：？」

すがりつく様に俺を見るみゆが再び俺の欲望をかき立てていく。
いつもそうだ：みゆがそこにいるだけで、簡単に男の理性が吹き飛ばされる。

しかしどう取ったらいいんだその台詞は？と

放たれた言葉の理解に困る俺へと向け続けられる：潤んだ上目遣い。

「何で、答えてくれないの？」

何なんだよ？やはり、いつものみゆとはどこかが違う。

『どうして今日はそんな事を言うんだ？』

「自分でも、わからないの：でも、嫌じゃないんだもん：」

木村さんにしたキスについてあれだけ俺を責めておいて何を、言ってる：？

「アキはいつも私の気持ちなんか無視してキスしたりしてきたじゃない。

なのに何で今日は怒るのっ：？」

みゆは恥ずかし気に俺から視線を落とした後も必死になって言葉を

連ねるが

怒ってるのはみゆだろ：

『悪かったよ…』

「何で、謝るの…？ 私は謝って欲しいんじゃないっ」

なら、俺にどうしろって言うんだよ…等と

このお手上げ状態に溜め息ばかりが漏れる中

『今日、変だぞ？ 何かあった…』

「全部アキのせいなんだからっ…アキが悪いんだから…」

やがて俺に向けられたみゆの瞳が、みるみるうちに雫を纏う。…何故また泣く？

『落ち着けて…』

そうして…——みゆの肩に手を添えようとした時だった。眩く様に微かに押し出されたみゆの言葉によってその手を止められてしまったのは。

「…アキに…キスして欲しいって思っちゃったんだもん…っ」

俺に…して欲しかった…？ 思わず聞き返しそうになる

『それって、どう言う事？』

——淡い期待が胸をよぎる

「えと…どーゆうって…」

——みゆの恥ずかし気に歪んだ顔がたまらなく可愛い

『……みゆ、言えよ…』

——聞き流してなんかやらない

「えーっと…それは…」

そして俺は、この口箆るも愛らしい唇を親指でこじ開け
そのシワを作る程戸惑っている小さば顎を持ち上げた。

『——みゆ？聞きたい…』

いつもと違うみゆの態度の理由が今、ようやく。解った——
|。

#12 聞きたいコトバ（後書き）

おはようございます、如月らむです＊

だんだんとタカにいが物語に馴染んできました。笑
私は一人っ子なので、こんなお兄ちゃんがいたらなあと思
いながらいつも書いていたり。

ちなみに、舞台になっている大きな公園は、井の頭公園☆
次の scene は半分実話だったりします。照。

想いが重なりそうなアキとみゆ。
次回も宜しくお願い致します♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6181y/>

愛しさも、切なさも。

2012年1月15日08時52分発行